

O B A R A

松本市小原遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1993.3

松本市教育委員会



OBARA

松本市小原遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1993.3

松本市教育委員会

序

松本市南部に位置する芳川地区では、平成元年に県道環状高架線新設に伴う発掘調査が行われており、小原遺跡の存在が知られていましたが、このたびその一帯に土地区画整理事業が及ぶことになりました。そこで文化財の保護を図るために、松本市が芳川小屋地区土地区画整理組合より委託を受け、教育委員会が事業に先立って小原遺跡の第2次発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うこととなりました。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成4年7月から同年11月にかけて行われました。作業は夏の猛暑や乾燥、強風に悩まされましたが、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居址62軒のほか、掘立柱建物址5棟、中世の造構を発見し、また同時期の遺物を多数得ました。特に、2,000枚に及ぶ古銭を1カ所に埋納した造構は注目すべき発見です。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料となることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾の中で、文化財保護に携わるもの苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた芳川小屋地区画整理組合、芳川土地改良区の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例　　言

- 1 本書は、平成4年7月27日から11月7日にわたり実施された松本市芳川小屋に所在する小原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は平成4年度芳川地区土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、芳川小屋土地区画整理組合より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
- 3 本調査および本書の作成は松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。
- 4 本書の執筆は第Ⅰ章：事務局、第Ⅱ章第3節2：竹内靖長、同3～5：木下守、その他を竹原学が担当した。
- 5 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内田和子、上条尚美、倉科祥恵、高山一恵、堤 加代子、村松恵美子、村山牧枝

遺物実測：木下　守、竹原久子、中村朝香、平出貴史、松尾明恵、MIN AUNG THWE

遺物トレース：開嶋八重子、竹原久子、中村朝香、松尾明恵

遺構図整理：石合英子

遺構図トレース：開嶋八重子、玉井あづさ

図版作成：石合英子、林　和子

写真撮影：市川温・木下守(現場)、宮島洋一(遺物)

- 6 現場調査、遺物整理において、次の方々よりご教示を受けた。

板倉欽之、笠本正浩、樋口昇一、野村一寿、保坂康夫

- 7 本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

堅穴住居址→住、掘立柱建物址→建、土坑→土、ピット→P

- 8 図表中の方位は磁北を指している。

- 9 本調査で得られた出土遺物および記録類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

卷頭カラー図版

序

例 言

目 次

挿図目次

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 過去の調査	1
第3節 調査体制	2

第Ⅱ章 調査結果

第1節 調査の概要	4
第2節 遺 構	
1 壓穴住居址	7
2 壓穴状遺構	7
3 掘立柱建物址	7
4 柱穴列	8
第3節 遺 物	
1 土器・陶器	14
2 金属製品	23

第Ⅲ章 調査のまとめ

図 版

写真図版

図版目次

図版 1 第30・31・33・91号住居址	図版23 土坑(2)
図版 2 第34・35・95号住居址	図版24 溝状遺構・埋納鉄
図版 3 第36・37号住居址	図版25 出土土器(1)
図版 4 第38~40号住居址	図版26 出土土器(2)
図版 5 第41・43号住居址	図版27 出土土器(3)
図版 6 第42・44~46号住居址	図版28 出土土器(4)
図版 7 第47~51号住居址	図版29 出土土器(5)
図版 8 第52・53・55・56号住居址	図版30 出土土器(6)
図版 9 第57・58・61号住居址	図版31 出土土器(7)
図版10 第59・60・88号住居址	図版32 出土土器(8)
図版11 第62~65号住居址	図版33 出土土器(9)
図版12 第66~68・70号住居址	図版34 出土土器(10)
図版13 第69・86・87号住居址	図版35 出土土器(11)
図版14 第71~74・90号住居址	図版36 出土土器(12)
図版15 第75~77号住居址	図版37 出土土器(13)
図版16 第78~81・85・89・93号住居址	図版38 出土土器(14)
図版17 第83・84・94号住居址	図版39 出土土器(15)
図版18 第5・6号壓穴状遺構、第6号掘立柱建物址	図版40 金属製品(1)
図版19 第4・5・7号掘立柱建物址	図版41 金属製品(2)
図版20 第8・9号掘立柱建物址	図版42 銭貨(1)
図版21 柱穴列	図版43 銭貨(2)
図版22 土坑(1)	



●印 調査地点

- | | | | | |
|----------|---------|-----------|------------|-----------|
| 1 小原遺跡 | 6 竹瀬遺跡 | 11 小星遺跡 | 16 北原遺跡 | 21 神戸遺跡 |
| 2 出川南遺跡 | 7 向原遺跡 | 12 若宮遺跡 | 17 小赤遺跡 | 22 牛の川遺跡 |
| 3 南原遺跡 | 8 百瀬遺跡 | 13 吉田川西遺跡 | 18 下神遺跡 | 23 長者屋敷遺跡 |
| 4 野溝遺跡 | 9 高畠遺跡 | 14 小池遺跡 | 19 中二子遺跡 | |
| 5 平田本郷遺跡 | 10 村井遺跡 | 15 松山遺跡 | 20 くまのかわ遺跡 | |

図1 遺跡の位置と周辺遺跡

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

小原遺跡は松本市の南部、芳川小屋地籍に所在する古代～中世の集落址として知られ、平成元年の主要地方道環状高架線建設に先立つ発掘調査によりその内容が明かとなっている。

平成4年、芳川小屋地区画整理組合により土地区画整理事業がこの地に計画され、遺跡の大半が事業予定地にかかると判明した。松本市教育委員会と区画整理組合が遺跡の保護策について協議を重ねた結果、遺跡の破壊やむなきに至ったため事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることになった。そこで松本市教育委員会では発掘調査業務を(財)松本市教育文化振興財團に委託し、松本市立考古博物館が発掘調査を行った。

第2節 過去の調査

小原遺跡は過去において既に発掘調査が実施されており、今回は第2次の調査となった。本節では第1次調査についてその概要を記しておく。詳細については報告書が刊行されているので参照されたい(『松本市小原遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1990)。

第1次調査は主要地方道環状高架線建設に先立ち、平成元年5月～7月に実施された。位置的には今次調査の14区と15区の間、JR篠ノ井線を挟んで東西710mの範囲が対象となった。ちょうど遺跡の中央を東西に貫く長大なトレンチを入れたこととなる。その結果遺跡の時期は古代から中世に及び、集落の立地も奈良・平安時代ではJR線を中心とした洪積台地面に堅穴住居址、掘立柱建物址が展開し、中世に至っては西側、奈良井川の沖積面まで堅穴状遺構、掘立柱建物址、柱穴列等が広がりをみせることが判明した。

出土遺物では円面鏡、墨書き土器等、古代の文字関係資料が多出している。特に墨書き土器では「又」の字が多くみられ、今次調査でも同じ傾向が窺え注意される。鐵鏃の出土も本調査と合わせ遺跡の性格を物語る資料となった。中世では短刀、馬具等の良好な鐵器、刀装具等の銅製品が出土している。

最後に検出遺構・遺物について列記しておく。

検出遺構	堅穴住居址	29棟	(奈良・平安時代23棟、中世6棟)
	堅穴状遺構	4基	(中世)
	掘立柱建物址	3棟	(奈良・平安時代2棟、中世1棟)

柱穴列	3列 (中世)
土 坑	54基
ビット	130基
溝状造構	5条
出土遺物	奈良・平安時代 土器・陶器類(土師器・須恵器・灰釉陶器) 金属製品(鉄器:刀子・鎌・鎌・鐸、銅製品:帶金具) 石器(砥石)
中 世	土器・陶磁器類(土師質土器・山茶碗・青磁他) 金属製品(鉄器:短刀・刀子他、銅製品:刀装具・鏡)

第3節 調査体制

調査団長 守屋立秋(松本市教育委員会教育長)
 調査担当者 木下 守、竹内靖朗、竹原 学、市川 温(考古博物館)
 調査員 桐原 健、太田守夫、三村 肇、松尾明恵、竹原久子
 協力者 青木雅志、浅井信興、浅輪敬二、荒木 龍、飯ヶ浜典男、五十嵐周子、石合英子、市川景介、上野章子、内澤紀代子、内田和子、内山美紀、王 翁豫、大城よしの、大谷成嘉、大谷 房夫、大塚製姿六、大月みや子、大月八十喜、大野健二、岡崎祐司、岡部俊顯、小野光信、開鷗八重子、香取朋代、上條尚美、木村隆敏、木下真由美、黒木 清、久保真由美、倉科祥恵、小岩井美代子、小島茂富、小松正子、齊藤政雄、坂口ふみ代、下谷亜希子、瀬川長廣、高橋登喜雄、高山一恵、田口吉重、竹平悦子、田多井亘、堤 加代子、鶴川 登、中嶋秋子、中村朝香、中村敦子、中村 恵子、中村安雄、服部 寛、原田晋太郎、平出貴史、藤本利子、洞沢文江、本荘健一、松田秀子、 松本洋子、丸山久司、丸山恵子、萬川晶子、三澤元太郎、道浦久美子、三井千明、三宅康司、宮田 貴史、明神 功、MIN AUNG THWE、村田昇司、村松恵美子、村山牧枝、堀 國成、百瀬二三子、百瀬義友、森井柳三郎、山田英之、山田 耕、山田昌子、横山 仁、與曾井尋由、米山楨興、米山泰正、林 嵐、和田和哉

事務局

市教育委員会:鳥村昌代(社会教育課長)、田口 勝(課長補佐)、窪田雅之(主任)

(財)松本市教育文化振興財团

事務局:深澤 直(事務局長)、牟禮 弘(局次長)、青木孝文(次長補佐)

考古博物館:神沢昌二郎(館長)、直井雅尚、関沢 啓(主任)、久保田 利(主事)、藤原美智子

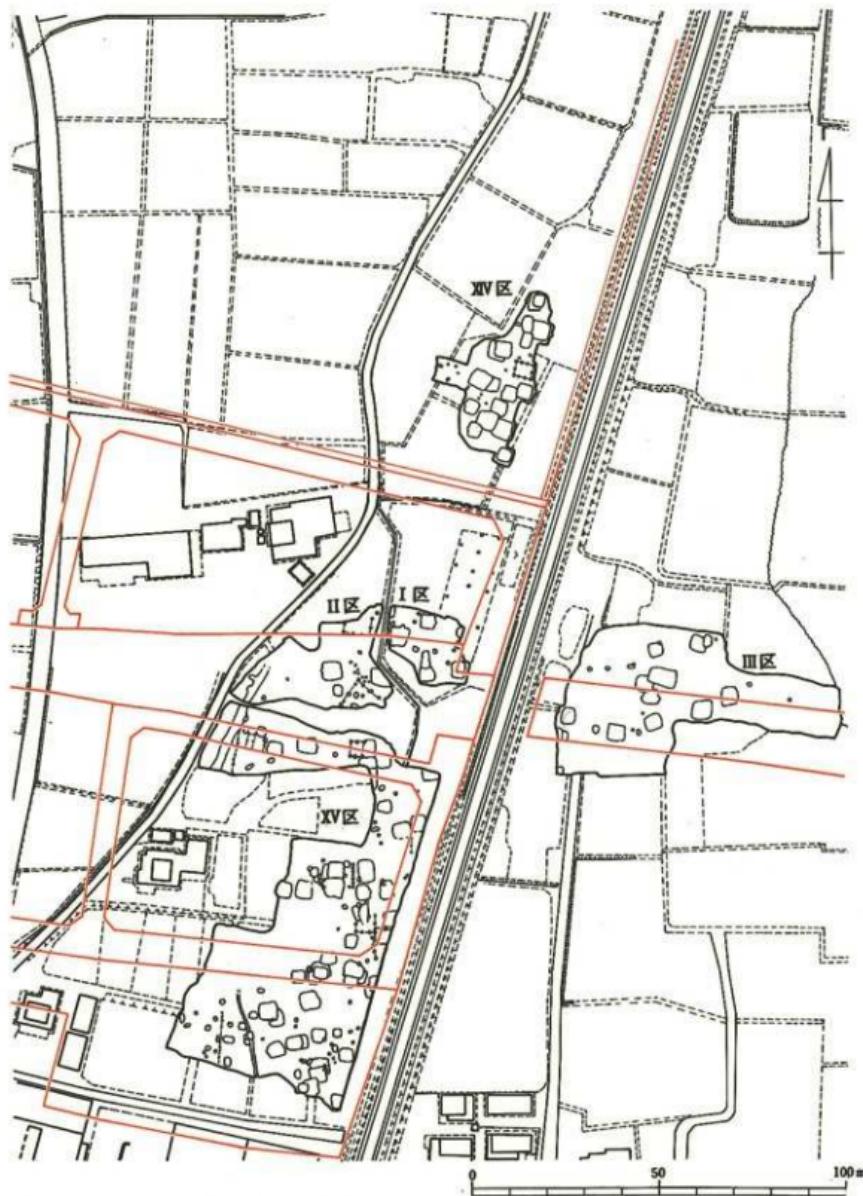


図2 調査範囲

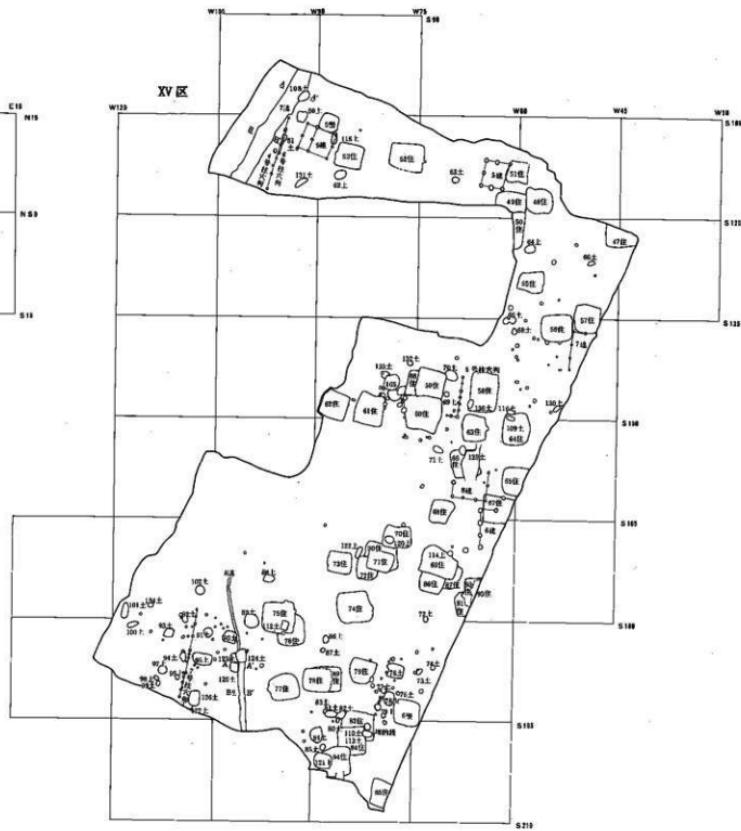
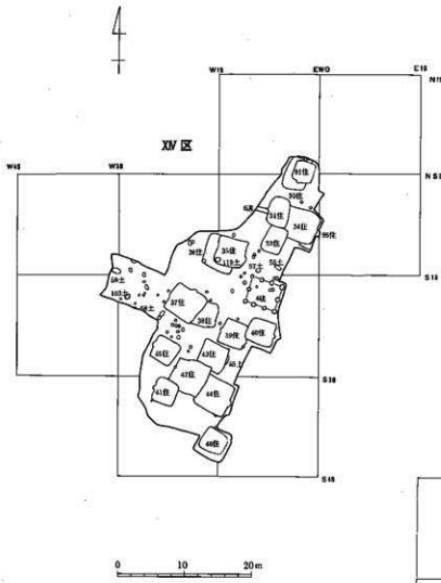
第Ⅱ章 調査結果

第1節 調査の概要

今回の調査はJR篠ノ井線の西側、環状高架線の南北一帯が対象となった。しかしながらあまりに広範囲に及ぶため、調査箇所の選定にあたり重機を用いてトレンチによる試掘調査を実施することとした。その結果、第1次調査の所見から予想した通り、篠ノ井線に沿う洪積面に遺構の集中がみられ、偶然にも埋納鉄を検出したため調査箇所を決定したものである。この西側一帯には中世の遺構が広がっているものと予想されるが、調査期間、予算の制約から調査を断念せざるを得なかつた。調査区は第1次調査からの連番で県道の北側を14区、南側を15区とし、それぞれの面積は644m²、3664m²、総面積4308m²を測る。遺構名についても第1次調査からの連番とした。

調査遺構の測量については任意の基準点から磁北方向に1辺3mの方眼区画を設定して行ったが、第1次調査区との厳密な位置関係は明らかにできなかった。調査地の現地目は水田・畑地で、重機により遺構検出面までの土砂を除去した後、遺構検出・掘り下げを行っている。その結果検出された遺構は以下の通りである。

検出遺構	縦穴住居址	62棟(奈良・平安時代)
	縦穴状遺構	2基(中世)
	掘立柱建物址	6棟(奈良・平安時代4棟、中世2棟)
	柱穴列	4列(奈良・平安時代1列、中世3列)
	土 坑	69基(奈良・平安時代～中世)
	ピット	165基(奈良・平安時代～中世)
	溝状遺構	3条(奈良・平安時代1条、中世1条、中世以降1条)
	埋納鉄	1基(中世)
出土遺物	縄文時代	土器(晩期末) 石器(石錐)
	奈良・平安時代	土器・陶器類(土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器) 金属製品(鉄器:鎌・刀子・釘他、銅製品:帶金具) 石器(砥石)
	中 世	陶磁器類 金属製品(鉄器、銅製品:錢)



第2節 遺構

1 壇穴住居址(図版1~17、表1)

今回検出された壇穴住居址62棟はいずれも奈良時代末~平安時代(長野県埋蔵文化財センター編年5~14期、以下この時期区分を用いる)のもので、時期的な分布をみると、5~8期の住居址が31棟、11~14期のものが15棟存在し(時期不明11棟)、前者を小原遺跡前半期の集落、後者を後半期の集落と見る事ができる。前半期の集落は北側、14区付近にその中心をおきつつも15区まで満遍なく見られるのに対して、後半期では南側、15区に集中し分布に片寄りが生じる。

前半期の遺構を見ると、大半の住居址が方ないし長方形で、壁が直線的な整った形態である。規模は1辺3~5m、床面積8~22m²のものがあり、20m²を越す大形の住居は14区に集中する。カマドは西壁または東壁の中央に設けられ、袖の石組みがしっかりしている。40・41・44・45住のように張出カマドも見られる。屋内施設はカマド脇に貯蔵穴を持つ例が多い。柱穴は大形の住居も多い。

後半期の遺構は隅丸で壁中央がやや張り出す形態が多い。方形または長方形を基本とするが、69住は壁の一部が張り出す特異な形態である。規模は一辺4~5m、床面積9~18m²程度だが、60住は24m²と突出して大きい。カマドは東壁北隅に設ける例が圧倒的である。石組みは前半期に比べて小規模な礫を用いたり袖が不明瞭な場合が多い。屋内施設は貯蔵穴を有する例が見られ、柱穴は明瞭に確認される例は少ない。

その他時期不明のものも含め、58住のように明らかにカマドを有さない遺構が存在し、1次調査でも確認されている(17住)。また各期を通じて住居廃絶後に礫の投げ込みを行う例が多く見られる。

2 壇穴状遺構(図版18、表1)

2基が検出されている。5基は隅丸方形を呈し、やや中央部の低い底面を有する。壁の立ち上がりもなだらかである。ピットなどの施設は見られないが、覆土中に多量の礫が集積されている。中世に属する。南接して同時期の9建が存するが、軸を揃えること、柱穴との寸法および位置関係からみて同時に存在し、一体で機能した可能性が高い。

6基は当初平安時代の住居址として調査を進めたが、銭の出土によよんで中世の遺構と判明した。西壁に張出部、幅80cmほどのテラスを有し、底面は砂利層を掘り抜き非常に深い。覆土上層から中層にかけては礫の投げ込みが多く、平安時代の土器片が目立つ。下層から底面で銭3枚が出土した。壁・底面は砂利層中のため崩れやすく、床面施設は検出されない。壇穴建物址の一種であろうか。

3 獨立柱建物址(図版18~20、表2)

奈良・平安時代に属する4棟はいずれも側柱式建物である。柱配置は2間×2間の5建を除き他

は3間×2間であり(または推定され)、規模的にも似通っている。柱穴内からの遺物の出土はほとんどないが、唯一4建のP5内より埋納したと思われる須恵器杯が出土した。この杯は5~6期の特徴を示し、周辺の住居址と時期的に重なる。また体部、底面の2カ所に「又」の墨書きがみられる(図版39-338)。

中世と推定されるものは、いずれも奈良・平安時代の掘立柱建物址に比較して柱穴の直径が小さく、柱痕も細い。9建は西側に庇が付くものであろうか。北接する5建との関係も注意される。

4 柱穴列(図版21、表2)

確認された4列の内、5柱については柱穴とその配置がしっかりとしており、周囲の住居址と軸を揃えることから奈良・平安時代に属するものと推定した。他は柱穴が細く柱配置が整わないこと等から中世に下るものと考えたい。位置的にも、4・6柱は9建や5壁と、7柱は土坑・ピット群に近接あるいは混在しており、中世の遺構群を形成したものと考えられる。

5 埋納銭(図版24)

15区南部、83住の西隣で検出された。東西103cm×南北60cmの掘り方底面よりやや浮いて、ムシロ状の粗い編み物に入れて埋納したものと考えられ、錢を取り上げ後にわずかな繊維の断片がみられた。錢は総数2701枚で「差し」の状態をよく残すが、上面が表土除去の際動いてしまったため枚数を計測できたのは4束だけであった(図中で、西側の浅い位置に散らばっている錢はその際に動いたものである)。各束とも糞2本を緩く絡めた紐を錢の孔に通して結束し、埋納時縱位あるいは斜位に置かれた状況を示す。差しの単位枚数は判明したもので93・97・101・103枚を数え、おおむね100枚前後にまとまるものの同数とはなっていない。また1差し100枚として全部で27束前後埋納されたものと考えられる。なお、各差しの中で錢の表裏面の向きに規則性は見られなかった。錢種についても遺物の項で詳しく述べるが、56種が確認された。一番初鋳年の新しい錢は「至大通宝」(初鋳1310年)であり、また「洪武通宝」(初鋳1368年)、「永樂通宝」(初鋳1408年)等明錢を全く含まないことからこれらが埋納された年代を14世紀前半を中心とした時期と推定する。

6 土坑(図版22・23)

14区6基、15区63基が検出された。その平面形態、断面形、内部の状態には様々なものがあり、時期的にも決定の困難なものが多いが、奈良・平安時代に帰属するもの、中世あるいはそれ以降のもの等がある。

まず、その形態から墓址と考えられるものとして118土、103土、112土他がある。118土は出土遺物からみて平安時代の土坑墓と推定される。南側の幅がやや広い隅丸長方形を呈し、平坦な底面である。南寄り中軸線上に床面より若干浮いて鉄鋤2点が平行に出土した。更にこれらの上部には、

灰釉陶器純(下)と土師器杯(上)が正位に重ねられた状態で出土している。北東隅の底面にも鉄器(苧引金具か)が見られる。人骨等は残存していない。103土、112土は中世の火葬墓として捉えられ、木炭と骨片、および銭が残存し、土坑内が被熱していた。112土では下層に礫の集積が行われている。

墓址以外の土坑は、坑内に礫が多く見られるものとそうでないものがある。前者には方ないし長方形プランで覆土下層から底面に意図的に礫を集積させたもの(60土・93土・121土等)、円形のピット状を呈し、礫を内部に詰め込んだもの(76土・110土等)、隅丸長方形ないし梢円形を呈し覆土中に礫を投げ込むもの(75土・84土・89土・90土・93土・105土等)がある。礫の見られないものでは円~梢円形基調で底面が平坦なものが多い。15区北部では88土の様にロームマウンド的なものが多くみられた。その他むしろ柱穴と捉えた方がよいものとして70土があり、下層に柱痕を有している。その直径は40cmを測り、かなり太いものである。周囲に対応する柱穴が見あたらず、単独で立てられた標柱の様なものであろうか。

各土坑の帰属時期はその根柢をほとんど知らないが、周辺遺構との関連でみると大半は中世のものと推定されよう。

7 ピット(挿図3)

総数165基が検出された。大半は直径15~40cmの円形を呈し、深さは15~40cm程度を測る。これらのあり方は一定の区域に集中する傾向を示している。まず14区では4建周辺、45住と37住の間、37住西側に集中する傾向が窺え、全体に直径の大きなものが多い。中には柱痕が観察されるものもある。時期的な位置づけは難しいが、形態からみて奈良・平安時代のものが主体かと思われる。

15区では土坑と同様3カ所に集中が見られる。まず南部の8溝周辺では小径のものが集中し、土坑と群をなしている。おそらく中世のものであろう。調査区の南東隅、6塁から84住周辺でもやはり土坑と一体となる群がみられ、中世のものと見られる。調査区中央の60・61住周辺にも土坑とともにややまとまってピットがみられ、大半が住居址を切ることからやはり中世に下る可能性が高い。

8 溝状遺構(図版24)

3条検出された溝状遺構のうち、6溝についてはその検出位置が耕作土直下と浅く、底面に鉄分の沈殿やシルトの堆積が見られることから近世以降の用水路と考えられる。15区北西部の7溝は集落の乗る洪積面の西縁(現道路)に沿って北走し、第1次調査の2区に連続している。その規模・位置・堆積状況からみて奈良・平安時代に遡り、集落の西端を区切るとともに、集落内に水を供給した用水路としても機能した可能性がある。15区南西部の土坑・ピット群の集中域で検出された8溝は土坑との重複関係からみて中世のものであろう。

表1 住居址・竪穴状遺構一覧表

住居 號	平面形 式	規 模	主軸方位 長×幅×深(㎝) 床面積	カマド	遺 構 所 見	時 期
30	長方形	478×360×10	N-16°-E (東駆)	91住・P133に切られる。床面は砂利層中にあり、軟弱。		?
31	長方形	432×316×30	10.7 N-75°-W 西壁中央 石 組	34住を切る。溝6に切られる。床面は砂利層に貼床するが軟弱。カマドは袖2石、支脚、煙道部2石を残す。P2は大形で深い。カマドへ南壁下に遺物散在する。墨書き土器「木」、「匂」?出土。		?
33	長方形	400×306×30	9.9 N-63°-W 西壁中央	34住を切る。カマドへ中央部に窓の投げ込み多い。カマドは火床面を残す。床面軟弱。墨書き土器「六」出土。		?
34	方 形	521×500×38	20.7 N-113°-E 東壁中央 石 組	95住を切り31住に切られる。床面は堅致な貼床。南西部を中心に中→下層に窓多。カマドは袖4石を残す、他の石材は南西床面に散乱。P3-6・7-11は支柱穴。南壁東寄り中層より鉄錆出土。墨書き土器「宿」「人」他。		5 1 6
35	方 形	470×430×16	16.0 N-107°-E 東壁南寄り 石 組	36住を切り119住に切られる。床面は東半を中心に堅致な貼床。カマドは袖10石を残す。中央部下層に窓・遺物散在。墨書き土器「金」?計3点出土。		6
36	方 形	465×495×10	N-70°-W 西壁中央	33住に切られる。カマドは袖2石を残す。西壁沿いに窓。遺物少。黒書き土器1点出土。		5
37	長方形	520×446×20	20.7 N-56°-W 西壁中央 石 組	38住を切る。軟弱な貼床を行う。P1-2-4は柱穴か。カマドは袖4石・支脚を残存する。北壁中央に浅い張出し有り。墨書き土器「又」出土。		5 1 6
38	方 形	392×(340)×20 (11.4)	N-108°-E 東壁中央 石 組	37住に切られる。カマド左右に窓・遺物多。カマドは両袖はほぼ完存。支脚有、遺物多。東壁下に周溝。墨書き土器出土。		8
39	長方形	378×408×25	(12.7) N-67°-W 西壁中央	40住・P151に切られる。床面軟弱。カマドは火床面のみ残す。カマド前を中心窓・遺物多。墨書き土器「又」他7点出土。		6
40	長方形	440×358×30	13.0 N-113°-E 東壁中央 石組突出	39住を切る。貼床はやや堅い。カマドは袖6石・支脚を残存。床面中央部には窓が積重されている。墨書き土器出土。		6 1 7
41	方 形	372×368×25	10.4 N-68°-W 西壁中央 石組強出	42住を切る。床面は軟弱。カマドは袖3石のみ残す。カマド前→床中央に窓集中。P2-3-4-12柱穴か。墨書き土器出土。		7
42	方 形	524×510×10	(22.4) N-117°-E 東壁中央	43・44住を切る。41住に切られる。床面は軟弱。P3-11-14-1 9は柱穴、P1-2-18-20は支柱穴か。P24は貼床下より検出。カマドは袖3石を残し、右側貼床下に旧カマド火床を残す。墨書き土器、灰釉陶器三足盤出土。		8
43	方 形	410×390×22	13.7 N-115°-E 東壁中央 石組	55住を切る。42住に切られる。貼床は軟弱。カマドは両袖・支柱はほぼ完存する。P4-5は支柱穴か。床面中央に窓・遺物多い。墨書き土器「財富加」、「注」他計4点出土。		8
44	方 形	513×486×22	21.2 N-117°-E 東壁中央 石組強出	42住に切られる。床面は軟弱。ピットの大半は柱穴か。南壁下に周溝有り。カマドは袖石をほぼ残す。墨書き土器出土。		5 6
45	方 形	390×354×15	11.3 N-56°-W 西壁中央	貼床は平坦だが軟弱。カマドは石材が残存せず。		?
46	(方形容)	345×(285)×20	N-117°-E (東壁)	床面は比較的堅致。東側の焼土はカマドに伴うものか。西~北壁に周溝有り。南半部に遺物・窓多い。甲斐型杯(馬鹿者)出土。		5 6
47	(方形容)	? × ? × 25	N-0	黄褐色七中に床面があり非常に堅致。P3-4は柱穴でP3に柱有り。墨書き土器「上」、「又」、甲斐型杯、灰釉陶器刻印出土。		?
48	方 形	(396×355)×8	12.9 N-8°-E	49住に切られ壁残存せず。床は砂利層で軟弱。各ピットは柱穴か。		?
49	(方形容)	450×? × 20	N-8°-E	48住を切る。50住に切られる。床面は砂利層中にあり、軟弱。		?
50	(方形容)	548×? × 20	N-8°-E	49住を切る。床面は砂利層中にあり、軟弱。		?

住居 No	平面形 式	規 格	主軸方位	カマド 付	調査の結果		時期
					長×幅×深(cm)	床面積	
51	方 形	(330) × 320 × 5	9.0	N-9°-E	北壁中央	5建・P208に切られる。床面は砂利層に薄く貼床する。カマドは火床面・縦り方のみ残存。	5 6
52	長方形	510 × 422 × 10	18.8	N-100°-E	東壁中央	床面は貼床をするがやや軟弱。カマドは火床面・袖2石・煙石組造を残す。柱穴はP1~P4が該当。	5 6
53	長方形	408 × 362 × 10	12.8	N-78°-W	西壁中央	床面は黄褐色土中にあり、比較的堅緻。カマドは火床面を残すのみP1~P4は主柱穴か。	?
55	長方形	386 × 320 × 5	10.1	N-90°-E	東壁中央	床面は砂利層に貼床をするが軟弱。カマドは火床面のみ残す。	6 8
56	長方形	486 × 382 × 20	15.4	N-90°-E	東壁北隅 石組	黄褐色土中にあり、床面堅緻。周溝はほぼ4周する。カマドは袖6石を残し、ハの字状に組む。	12 13
57	方 形	410 × 396 × 10	(13.8)	N-90°-W	西壁中央 石組	床面は黄褐色土中にあり、堅緻。周溝がほぼ完周する。カマドは袖6石を残す。カマド北~北西隅にかけて螺物石錐14点出土。	11 12
58	長方形	590 × 415 × 30	18.8	N-7°-E	な	北西隅床が高まる。カマドは存せず。覆土中~下層に小・中縄が多量に集積するが、確沿いにはみられない。特殊な遺物か。	?
59	方 形	430 × 428 × 20	14.2	N-80°-W	西壁中央	60・88住・70十を切る。床面は非常に堅緻。カマドは火床面のみ残す。P4~6は主柱穴、P2~3は入り施設に觸れるものか。各隙に周溝が見られる。覆土中に縄の投げ込みが嵌著に見られる。墨書き土器2点出土。	5 1 6
60	方 形	360 × (514) × 25	(24.4)	N-2°-W	な	60・88住・P238~245に切られる。床面は黄褐色土中にあり、中央部は非常に堅緻。P1~P6は土坎状を呈する。北東隅覆土中より鉄錐出土。	14
61	方 形	458 × 444 × 24	15.0	N-100°-E	東壁中央 粘土	106十を切る。P187~244に切られる。黄褐色土中にあり堅緻な床面。カマドは黄褐色土を用いた粘土袖である。	5 6
62	方 形	397 × 400 × 30	12.7	N-74°-W	西壁中央 石組	床面は黄褐色土中にあり明瞭だがあまり堅くはない。カマドは両袖をほぼ充存し土削器多量に出土。P2は浅い縫合ビットで、覆土に焼土が多くみられた。	7
63	方 形	384 × 382 × 16	10.1	N-0°	な	床面は黄褐色土中にある。東壁中央の張山部は被窓面、石材等全く見られず、カマドと既定できない。遺物は東半部に多く出土した。甲斐型窓出土。	12 13
64	長方形	456 × 400 × 12	15.0	N-60°-E	東壁北隅 石組	115・116土を切る。土109に切られる。東壁は剥離性の形態である。床面は平坦かつ堅緻。東壁および西壁沿いのビットは柱穴に觸れるものか。	14
65	(方形)	? × 434 × 15		N-0°		床面は砂利層中にあり、軟弱。中央部に縄の投げ込み多い。墨書き土器1点出土。	14
66	方 形	412 × 400 × 26	14.2	N-17°-W		129土に切られる。撲亂により床面の大平を失う。覆土中に縄の投げ込みがみられる。	5 1 6
67	長方形	? × 400 × 5		N-2°-E		P289に切られる。6・8建との前後関係は不明。砂利層中に構築され、軟弱な床面である。	8 9
68	(方形)	340 × ? × 20	(10.3)	N-14°-E		床面は黄褐色土中にあるが覆土との分別は困難。遺物・礫塊少。	?
69	長方形	552 × 430 × 12	18.4	N-20°-E	北壁東隅 石組	86・87住を切る。114上に切られる。北壁の西半がやや北に張る不整な形態である。床面は東半では堅緻なタケキ面をなすが、西半は軟弱である。カマドは火床面・袖2石を残す。覆土中には縄の投げ込みが見られる。ほぼ同時期の住居址が東西に切り合う可能性もあるが、遺存状況が悪いため不明である。	14 15

在地 No	平面形 長×短×深(cm)	床面積	主敷方 向	ウマド セイ 色	遺構・所見		時期
					長	幅	
70	長方形 431×305×16	10.8	N-5°-E	な し	120住に切られる。90住を切る。砂利層中に貼床するが軟弱。南半部の覆土中に跡が多い。		7
71	長方形 393×288×23	9.2	N-16°-E	な し	90・72住を切る。床面は砂利層中にあり、不明瞭。		12
72	長方形 368×310×8		N-0°		90・71住を切る。遺物・礫等少ない。		?
73	長方形 372×340×8	9.8	N-84°-W	西壁中央 石 組	床面は砂利が多く軟弱。カマドは袖蒸底部を残す。P1～P3は主柱穴か。		4 5
74	方 形 522×460×27	17.6	N-85°-E	東壁北側 石 組	111住に切られる。砂利層に貼床をして床となす。カマドは袖3石を残存する。		10 11
75	方 形 490×460×30	17.4	N-89°-E	東壁北寄 石 組	76住を切り、112Jに切られる。砂利層中にやや堅敏な黄褐色土を貼る。カマドは火床面、掘り方のみ残す。覆土中に礫の投げ込みがみられる。カマドは火床面のみ残存。墨書き跡出土。		13 14
76	方 形 450×416×30		N-7°-W	西壁中央	76住に切られる。砂利層に貼床するが軟弱。遺物は少なく、覆土中に礫の投げ込みがみられる。カマドは火床面のみ残存。墨書き跡出土。		11 12
77	長方形 476×383×30	11.6	N-100°-W	西壁中央 石 組	北壁はやや胴張りな形態をなす。カマドは縦を志として黄色土で構築する。主柱穴はP1～P4が該当。床面は軟弱。提灯形の特異な窓が出土し、他の変更も甲斐壁の特徴を示す。		11 12
78	長方形 (438)×343×25	12.5	N-85°-E	東壁中央	89住を切る。床面は砂利層中に構築される。カマドは火床面のみ残す。裡Jに中に礫の投げ込みが見られる。須志器淨瓶出土。		5 6
79	方 形？ 385×370×15	10.6	N-18°-E	な し	南半部が半円形を呈する特異な平面形である。カマドはみられず、P1-3は柱穴に開わるものか。甲斐型窓出土。		12 13
80	(方 形) ? × 420 × 25		N-87°-W		81住を切り、93住に切られる。床面は砂利が多く、縦まらない。西壁中央に張出がある。		5 6
81	(方 形) ? × 342 × 30		N-5°-W		80・93住、P342に切られる。P3は内部に礫が多くみられる。床面は小窓のため縦まりが悪い。墨書き土器出土。		5 6
83	長方形 390×490×20		N-15°-E	北壁東寄 右 組	84住、82・81、110・113住に切られる。床面は黄褐色土にあり、堅敏。カマドは火床面を残す。遺物は少ない。		5
84	方 形 420×414×43	(14.4)	N-90°-E	東壁中央 石 組	83住を切り、94住・113Jに切られる。床面は堅敏なタタキ床となる。カマドは袖を失うが、床中央にかけて上階備蔵類を多く出土。覆土中の礫投げ込みは少ない。		7
85	(方 形) ? × 380 × 10		N-16°-E		砂利層中に構築され、軟弱で縦まりのない床を呈する。小形のピット2基が検出された。		13
86	(方 形) 370 × ? × 22		N-16°-E		87住を切る。69住に切られる。床面は平坦だが堅くない。中央部を主体に縦が集積する。遺物は少ない。		?
87	(方 形) ? × 390 × 10		N-23°-E		69・86住に切られる。床面は軟弱で縦まりのない。		?
88	(方 形) 380 × ? × 12		N-90°-W	?	60住を切る。59住に切られる。床面は明瞭堅敏。		?
89	長方形 ? × 380 × 20		N-88°-E	東壁中央 石 組	78住に切られる。カマドは両袖を残す。P1～P3はその形状、位置より見て柱穴ではない。		?
90	長方形 480 × ? × 10		N-16°-E		71・72住に切られる。砂利層中にあり、軟弱な床面。北壁寄り床面より鉄鋸が出土。		13 14
91	長方形 320×310×15	8.1	N-16°-E	北壁中央 石 組	30住を切る。床面は點状薄く軟弱。カマドは右袖を残す。西～南に浅いピット有り。墨書き土器、須志器被焼出土。		5
93	(方 形) ? × 400 × 30		N-77°-W	西壁中央 右 組	覆土中に礫の投げ込みが豊富である。カマドは火床面、右袖を残し土器備蔵が出土。北側床面より灰釉陶器蓋の口頭部が出土。		5

番号	平面形	規格	主軸方向	カマド位置	遺物所見			年月	
					長×幅×深(cm)	床面標	地質		
94	方 形	464×448×46	(13.6)	N-90°-W	東壁北隅	84住を切り、121土に切られる。床面は黄褐色土中にあり、中央部で非常に堅硬なタタキ土となる。カマドは両袖、天井の一部を残存する。P1-2-7は本址に伴う柱穴か。カマド左脇に杯類多出。覆土中の礫投入はほとんどない。ビンセット状の鉄器が出土。			11 1 12
95	?	423×?×20			?	34住に切られる。床面は非常に堅硬。P1-2は貼床下に存在。		?	
5 壁	方 形	254×263×26	4.3	N-23°-E		底面に拳大～小児頭大の窓が集積する。9建に間連する遺構か。		中世	
6 壁	方 形	396×341×140	3.2	N-8°-E		中央が張り出す西壁下は浅くテラス状の段をなす。軟弱な砂利層を掘り抜き床面を構築するが、壁が傾斜するため狭い。上層には多量の礫が投げ込まれ、土師器・須恵器片が多いが、下層より鐵が3点出土する。		中世	

表2 建物址・柱穴列一覧表

柱	平面形	主軸方向	横 横 幅標(単位) 間標(単位) (m)	柱 高(m)	柱穴			備考
					横標(m)	高標(m)	柱底(m)	
4 建	長方形 側柱式		3間×2間 480×390	桁行 150~172(160) 梁間 182~204(195)	円 形	48~76×30~44	10基・φ20~24	P5柱痕内に須恵器杯 (蓋「又」)。
5 建	長方形 側柱式		2間×2間 370×335	桁行 176~194(185) 梁間 150~179(167)	円 形	45~80×5~26	7基・φ15~18	西壁は1間。51住との関係不明。
6 建	側柱式		3×2間以上 (550×460)	桁行 183 梁間 230	円 形	56~62×14~22	3基・φ20	調査区外にかかるため全形不明。3間×2間か。
7 建	側柱式		3×2間以上 (575×345)	桁行 190~200(192) 梁間 174	円 形	24~30×4~13	なし	57住を切る。
8 建	長方形 側柱式		3間×2間 500×230	桁行 152~196 梁間 102~124(115)	円 形	33~60×8~22	6基・φ13~22	66~67住との重複関係不明。
9 建	長方形 側柱式		2間×1間 380×300 底2間×1間 160×380	桁行 170 梁間 300	円 形	32~34×8~50	なし	118土を切る。5壁と密接に間連するものか。
4 柱			5 間 1110	200~230	円 形	24~27×10~25	3基・φ10	
5 柱	L字形		6 間×2間 490×165	南北 92~95 東西 100~65	円 形	20~52×6~20	2基・φ10~12	
6 柱			2 間 380	190	円 形	30~32×20~28	1基・φ12	
7 柱	L字形		不 定 1330×1140	不定	円 形	22~40×10~30	2基・φ7~16	

第3節 遺物

1 土器・陶器

(1) 縄文時代晩期末葉の土器(図版39)

平安時代の遺構に混入して大形壺の口縁部2点が出土している(348・349)。何れも直立ないしやや外開する口縁部を有し、外面に2条の刻目突帯を巡らす。頸部～肩部にかけては粗い条痕が斜位に施される。胎土は砂粒を含み黄褐色を呈する、この時期によく見られる特徴を示す。市内における類例としては石行、針塚遺跡などで出土しており、縄文時代晩期末における大形壺の受容を考える上で重要な資料といえよう。また、今回明確な遺構に伴って出土していないため推測の域を出ないが、近接する高畠遺跡においてほぼ同時期の土器棺墓が検出されており、本遺跡においても再葬墓など墓址として存在したものが平安時代の住居址によって破壊された可能性があろう。

(2) 奈良・平安時代の土器・陶器(図版25～39)

本遺跡から出土した土器・陶磁器は、主として奈良・平安時代の範疇で捉えられ、ごく一部は中世の様相を呈する。これらの土器群の様相を把握するにあたっては、長野県埋蔵文化財センターの中央自動車道長野線総論編の器種・器形・年代観に従った。各遺構から出土した土器群を把握するにあたり、器種・器形の分類と器種の組合せとその段階的把握は、文献1ですでにまとめられているので、ここではそれに従って観察を試みた。

① 種類・器種

本遺跡出土土器群では、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器と微量の綠釉陶器・内耳鍋の器種がみられる。

須恵器 食膳具では杯A・杯B・蓋・鉢がみられる。特殊品としては、91住から金属器の佐波利椀の模倣と考えられる「稜輪型土器」が出土している。煮炊具はみられず、貯蔵具では壺・甕類がみられる。78住からは、水瓶か淨瓶の頸部と考えられるものが出土している。

土師器 食膳具では杯A・杯C・椀・盤Bなどがみられる。煮炊具は、甕・小形甕・瓶・羽釜・円筒形土器などが出土している。貯蔵具はみられない。

黒色土器 食膳具では、杯A・椀・皿B・鉢Aなどがみられる。煮炊具・貯蔵具はみられない。

灰釉陶器 食膳具は、椀・皿・段皿などがみられる。貯蔵具は壺類のみ。煮炊具はみられない。

② 各土器群の様相

以下、各遺構の土器群の様相を述べる。

第30号住居址(1~7)

須恵器杯A(2)・杯B(3)・蓋(1)、黒色土器A皿B(4)・鉢(7)、土師器小形壺D(6)・壺B(5)を図化している。7期の様相と考えられる。

第31号住居址(8~19)

図化したのは、黒色土器A杯A(9~13)・椀(14・15)、土師器壺B(18)・小形壺D(6)・円筒型土器(19)、灰釉陶器椀(8)である。黒色土器A杯Aの9・10には「木」と「升」の墨書がある。図化できなかったものに、須恵器杯A・杯Bがみられる。本址の土器群は7期と考えられる。

第33号住居址(20~26)

図化できたのは、須恵器杯A(20)、黒色土器A杯A(9~13)・椀(23)、土師器壺B(26)・小型壺D(24・25)である。20・22には墨書がみられる。22は文字不明、20は「六」と判読できた。本址出土土器群は、7期と考えられる。

第34号住居址(27~44)

食膳具は、須恵器杯A(27~33・36)・杯B、黒色土器A杯A(37)の破片が出土している。37の杯Aの腰部には回転ヘラケズリ痕がみられる。貯蔵具は図示できなかったが、須恵器短頸壺がみられる。煮炊具は、土師器壺B・小形壺で構成される。なお、29・27にはそれぞれ「宿」「人」の墨書がある。35の黒色土器椀は混入品であろう。本址土器群は、5~6期と考えられる。

第35号住居址(45~63)

食膳具は、黒色土器A杯Aが主体となり少量の須恵器杯Aが伴う。黒色土器A杯Aは、底部回転糸切り調整のもの(50~52・54~56)と、手持ちヘラ削り調整のもの(53)がある。50~52には墨書がある。52は「金」、その他は不明である。須恵器杯A(46~49)は、体部が大きく開き、ロクロ目が目立つものが多い。貯蔵具はみられない。煮炊具は、土師器壺B(63)・壺C(61・62)が出土している。特殊品として円筒型土器が出土している。6期と考えられる。

第36号住居址(64~72)

食膳具は、黒色土器A杯A(67・69)、須恵器杯A(65)・杯B(66)・蓋(64)で構成される。黒色土器A杯Aの67・69は、底部の調整が回転糸切りした後に手持ちヘラ削りを施している。68には「日」の墨書がみられる。貯蔵具は、小形の須恵器長頸壺(70)が出土している。煮炊具は土師器壺C(71)、特殊品として円筒型土器(72)もみられる。5期と考えられる。

第37号住居址(73~75)

出土遺物は、きわめて少ない。図化できたのは須恵器杯A(73・74)、土師器小形壺D(75)の3点のみである。74には、「又」の墨書が体部と底部の2箇所にみられる。5~6期と考えられる。

第38号住居址(76~88)

食膳具は、黒色土器A杯A(76)・皿B(77)・鉢A(80)、土師器杯A(79)、軟質須恵器杯A(78)を図化している。黒色土器Aが主体となり、少量の土師器が混じる。77の皿Bには、墨書が2文字み

られる。貯蔵具は、須恵器長頸壺(85・86)のみ。煮炊具は、土師器壺B(84・87・88)・小形壺D(81・82)が出土している。特殊品としては、土師器円筒型土器(83)がある。外面は刷毛目調整され、粘土輪積痕が明瞭に残る。口縁部は屈曲して細くなっている。本址土器群は、8期と考えられる。

第39号住居址(89~105)

食膳具は、須恵器杯A(89~96)、黒色土器A杯(97~101)で構成される。黒色土器A杯Aの100・101の底部調整は、回転ヘラケズリされている。また、89~92・95・96・99には墨書がみられる。貯蔵具は、須恵器壺(105)のみ。煮炊具は、土師器壺B(103・104)・小形壺D(102)が出土している。6期と考えられる。

第40号住居址(106~112)

出土量は少ない。図化できたのは須恵器杯A(106)・壺(110)、黒色土器A杯A(107・108・109)、土師器壺B(111)・小形壺D(112)の6点のみである。109の底裏には墨書がみられる。黒色土器A杯Aは、大・小2法量みられる。6~7期と考えられる。

第41号住居址(113~125)

12点図化している。食膳具は須恵器杯A(114)、軟質須恵器杯A(113)、黒色土器A杯A(115~117・119・120・121)・椀(118)で構成される。120の杯Aは、底部から腰部にかけてヘラケズリ調整される。117の体部には墨書がみられる。煮炊具は、土師器壺B(123)・小形壺D(122)のみ。貯蔵具は、須恵器長頸壺(125・124)が出土している。124は、器高10.5cmの小形品である。胎土が在地産のものと異なるため搬入品と考えられる。本址土器群は、7期と考えられる。

第42号住居址(126~135)

食膳具は、須恵器杯A(126)、黒色土器A杯A(127・129)・椀(130・131)、灰釉陶器碗(128)・皿(134)・三足盤(133)を図化している。128の灰釉陶器碗の底裏には、墨書がみられる。刷毛塗り施釉され、底部は回転ヘラケズリ痕が残る。133の三足盤は、脚部が残存していないものの欠落部分が観察できる。施釉方法は、刷毛塗りである。煮炊具は、土師器壺B(135)・台付壺(132)が出土している。8期と考えられる。

第43号住居址(136~146)

食膳具は、灰釉陶器碗(142)、黒色土器A杯A(137~141)・皿B(136)がみられる。142の灰釉陶器碗は、刷毛塗り施釉されている。136・138・139・142には墨書がみられる。136は「財富加」、138・139は「辻」と書かれている。貯蔵具は出土せず、煮炊具は土師器壺B(143)・その他の壺(146)・小形壺D(144・145)を図化している。8期と考えられる。

第44号住居址(147~149)

本址からは、出土遺物が非常に少ない。図化したのは須恵器杯B(147・149)、土師器小形壺D(148)のみである。149の底部は、回転ヘラケズリのち中央部のみ手持ちヘラケズリ調整が施される。底裏には、墨書がみられる。その他、図化していないが土師器甲斐型杯の小片も出土している。時

期は、判然としないが5～6期と考えられる。

第45号住居址(150～153)

出土点数は少ない。黒色土器A杯A(150・151)、土師器壺B(152)・壺(153)の3点を図化している。153は、小形壺Dのように体部外面にカキ目を施している特殊な例である。その他、本址からは混入品と考えられる縄文晩期の土器片も出土している。出土量が少なく、時期は不明である。

第46号住居址(154～159)

食膳具は、須恵器杯A(154・155)、土師器杯C(156)、黒色土器A杯A(157)、須恵器鉢A(158)、土師器壺B(159)の4点のみ図化している。156は、いわゆる甲斐型杯である。底部回転糸切りのちヘラ削り、体部は外面手持ちヘラ削り・ヘラ磨き、内面に鋸歯状の暗文がみられる。5～6期と考えられる。

第47号住居址(160)

出土数が極端に少ない。図化できたのも、黒色土器A杯A(160)の1点のみである。内面は、磨きが難で、不明瞭である。本址土器群の時期は不明である。

第48号住居址(161)

灰釉陶器皿(161)の1点のみ出土した。漬け掛け施釉され、底部は回転ヘラケズリ調整されている。時期は不明である。

第49号住居址(166・167)

灰釉陶器碗(166・167)が出土している。ともに底部破片である。166の底裏には、刻書と考えられる沈線が観察できる。底部調整は回転ヘラケズリである。時期は不明である。

第51号住居址(162)

須恵器杯A(162)1点のみ出土している。底部は回転糸切り痕がみられる。5～6期の所産であろう。

第52号住居址(163～165)

須恵器杯B(164)・蓋(163)、土師器杯C(165)が出土している。165は、甲斐型土器の杯である。5～6期と考えられる。

第53号住居址(168・169)

須恵器杯Aを2点図化している。168・169ともに底部は回転糸切り調整である。169には体部下半と底部に「上」の墨書きがある。本址の時期は、出土数が少なく不明である。

第55号住居址(170・171)

黒色土器A杯Aが2点(170・171)出土している。171には「又」の墨書きがみられる。6～8期と考えられる。

第56号住居址(174～179)

黒色土器A・B、土師器、灰釉陶器で構成される。黒色土器Aは、碗(176～179)が主体である。

土師器は、杯(174～175)と壺類(実測可能なものは無)で構成される。杯は、口径10.1cmの小形品(174)と口径13.4cm(175)の大形品の2法量みられる。本址土器群の時期は、12～13期と考えられる。

第57号住居址(181・182)

灰釉陶器碗(182)・皿(181)の2点を図化・提示している。182は、体部が大きく内彎する深碗である。11～12期と考えられる。

第59号住居址(172・173)

出土数は少ない。須恵器杯B(172・173)の2点のみ図化している。172は、底部回転糸切りのちヘラ削りされている。173は回転糸切り後、付け高台のちナデ調整されている。2点とも底裏に墨書きがみられる。5～6期と考えられる。

第60号住居址(189～193)

図化できたのは5点のみである。基本的に灰釉陶器と土師器で構成される。土師器杯A(189～191)は、口径8.4～8.5cmの小形品と口径15.4cmの大形品の2法量みられる。灰釉陶器碗(192)・皿(191)はともに、底部に回転糸切り痕が残り漬け掛け施釉される。14期と考えられる。

第61号住居址(207～210)

須恵器主体の土器群である。出土点数は少なく、杯A(210)、杯B(209)、蓋(207～208)の3点を図化している。209の底部は回転糸切り、210の底部は回転ヘラケズリである。5～6期と考えられる。

第62号住居址(183～188)

5点図化している。須恵器杯B(185)・蓋(183・184)・長頸壺Cの口縁部と推定されるもの(186)、土師器壺B(188)・壺(187)で構成される。185は底部に回転糸切り痕が残り、腰部の立ち上がりも丸みを帯びている。187は器形が壺B類に類似するものの、胴部外面は刷毛目のちケズリ調整されている特殊品である。本址土器群は、7期と考えられる。

第63号住居址(194～200)

土師器主体の土器群である。食膳具は、杯A(194・195)、碗(196～198)で構成される。杯は、口径10.6～11.3cmを測る小形品である。煮炊具としては、土師器羽釜(199)、土師器壺(200)が出土している。199の内面は、板状の工具により横方向にナデ調整されている。本址土器群の時期は、12～13期と考えられる。

第64号住居址(201～206)

灰釉陶器と土師器で構成される。205の灰釉陶器碗は、底部が回転糸切り無調整である。施釉は、漬け掛けにより内・外口縁部になされている。底裏には墨痕がみられ、転用硯として使用された可能性がある。206は土師器碗である。底裏には回転糸切り痕がみられる。202～204は、土師器杯である。口径9.2～10.0cm・器高1.6～2.4cmを測る小形品である。本址土器群は、14期と考えられる。

第65号住居址(211～218)

8点図化している。基本的に灰釉陶器と土師器で構成される。灰釉陶器碗(214・216・217)は、腰部が張って口縁部がわずかに外反する。214は輪花碗で、底部に墨痕がみられる。218の皿は、内面見込み部と底裏に墨痕が残る。転用硯として使用された可能性がある。215は段皿である。口径5.6cmの小形品である。土師器杯Aは、3点(211～213)図化している。口径14.7～18.6cmの大形品である。213は、口縁端部内面に面を取っている。本址出土土器群は、14期と考えられる。

第66号住居址(219～223)

6点提示している。須恵器杯A(222)・杯B(220)・蓋(219)、土師器小形壺D(223)、瀬戸・美濃系陶器縁釉皿(221)を図化している。222は、底部回転糸切り調整される。220は底部回転ヘラ削りされるが、底部中央に回転糸切り痕が残る。221は混入品と考えられる。出土遺物が少なく判然としないが、5～6期と考えられる。

第67号住居址(224～228)

土師器杯A(226)、黒色土器A碗(225)、灰釉陶器皿(227)、土師器瓶(228)、須恵器杯A(224)の6点提示している。227の灰釉陶器皿の底裏には墨痕が残る。転用硯の可能性がある。228は、口縁内面から外面全体にかけてケズリ調整している。224は混入品と考えられる。本址出土土器群は、8～9期と考えられる。

第69号住居址(229～236)

食膳具と煮炊具のみが出土し、貯蔵具はみられない。食膳具は、土師器杯A(230・231・233・234)・碗(235)・盤B(232)、灰釉陶器碗(229)を図化している。杯Aは、口径8.9～9.9cmの小形品と口径13.6～14.8cmの大形品の大小2法量みられる。小形品は、器高が1.6～2.2cmと偏平化が著しい。煮炊具では、羽釜(236)が出土している。外面の一部に刷毛目がみられるが、雑なミガキにより仕上げられている。内面は、雑な刷毛目調整がされている。本址土器群の時期は、14～15期と考えられる。

第70号住居址(237～239)

出土量は非常に少ない。図化できたのは、軟質須恵器杯A(238)・土師器小形壺D(239)の2点のみである。破片資料としては、須恵器杯A・黒色土器A杯Aなどがみられる。7期と考えられる。

第71号住居址(240)

土師器杯Aが1点(240)出土したのみである。底部糸切り調整で、口径は14.6cmを測る。時期は、12期以降か。

第72号住居址(241・242)

灰釉陶器碗(241)・皿(242)の2点のみ図化できた。底部は、回転糸切りのち回転ヘラケズリ調整されている。出土点数が少ないため、時期については言及できない。

第73号住居址(243・244)

出土量が非常に少ない。244は須恵器杯、243は蓋である。244は天井部が盛り上がっているもの、端部が僅かに、「く」の字状に屈曲する。資料数が少ないと判然としないが、4～5期と考えられる。

第74号住居址(245～250)

6点固化している。灰釉陶器・黒色土器A・土師器で構成される。食膳具は、灰釉陶器碗(249)無高台の皿(248)、土師器杯A(245)、黒色土器A杯A(246・247)が出土している。灰釉陶器はすべて濁け掛け施釉され、底部に回転糸切り痕がみられる。247の底部には、ヘラ記号がみられる。煮炊具では、羽釜(250)が出土している。鈴は4単位みられる。内・外面は、雑な刷毛目の後ナデ調整を施している。本址出土土器群は、10～11期と考えられる。

第75号住居址(251～258)

食膳具は、土師器杯A(251・252)・碗(253)、灰釉陶器碗(257)・段皿(254～256)がみられる。土師器杯は、口径9.2～10.1cmの小型化したものである。257の灰釉陶器碗は、底部糸切り無調整で濁け掛け施釉される。丸石2号様式か。254の段皿底部には墨痕がみられる。本址土器群は、13～14期と考えられる。

第76号住居址(259～264)

本址土器群は、灰釉陶器の割合が高い。固化したのは、灰釉陶器碗(263・264)・皿(261)・段皿(262)、土師器杯A(259)・碗(260)である。264は、体部中位と底部に墨書きがみられる。底部は回転ヘラケズリ調整されているが、中心部に回転糸切り痕が残っている。時期は11～12期か。

第77号住居址(265～268)

出土数は少ない。黒色土器A碗(267)、土師器壺(265・268)・瓶状の特殊器形品(266)を固化している。267は、底部回転ヘラケズリ調整されている。265・268は、甲斐型の壺と考えられる。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向に刷毛目調整されている。底部は、木葉の圧痕が残っている。口縁端部は、短く屈曲している。266の器形は、胴部が大きく張り短頸壺に類似するが、瓶のように底部が抜けている。調整は、外面が縦方向の刷毛目、内面が横方向の刷毛目で仕上げられている。下端内面は、手持ちのヘラケズリされている。時期は、11～12期と考えられる。

第78号住居址(269～274)

出土遺物は少ない。269・270は須恵器杯A、273は淨瓶か水瓶の頸部と考えられる。頸部中位にカキ目状の強いロクロナデがなされている。金属器の模倣であろうか。271・272は黒色土器A杯Aである。274は土師器小形壺Dである。時期は、5～6期と考えられる。

第79号住居址(275～280)

出土遺物は少ない。土師器が主体となる。固化できたのは、土師器杯(275・276)・壺(279)・羽釜(278)である。279・280は、甲斐型壺と考えられる。時期は判然としないが、12～13期と考えられる。

第80号住居址(281)

出土遺物は、極めて少ない。図化できたのは、須恵器杯B(281)1点のみである。他に破片資料で須恵器杯Aがみられる。底部は、回転ヘラケズリ調整されている。5~6期と考えられる。

第81号住居址(282)

須恵器杯A1点(282)のみ出土している。体部中位には墨書きがみられる。小片のため時期は確定できないが、5~6期と考えられる。

第83号住居址(283~287)

須恵器主体の土器群である。杯A(283~285)、杯B(287)が出土している。杯Aは、すべて底部回転糸切り痕が観察できる。杯Bは、底部回転ヘラケズリで高台が外側にやや張り出す。5期の様相である。

第84号住居址(288~301)

須恵器・黒色土器A・土師器で構成される。須恵器は、杯A(293~296)、杯B(290)、蓋B(288)、短頸壺D(289)が出土している。杯Aは、すべて底部回転糸切りされる。黒色土器Aは、碗(297)、杯A(292)がみられる。土師器は煮炊具に限られ、甕B(301)、甕C(300)、小形甕D(298)が出土している。なお299の山茶碗の鉢、291・295の土師器杯Aは、本址土器群に属さない混入品と考えられる。本址土器群は、7期と考えられる。

第85号住居址(302~304)

土師器杯A2点(303・304)が出土している。口径10.4~11.4cmを測る小形品である。図化できない破片資料には、黒色土器碗がみられる。資料数が少なく判然としないが、13期の範疇に納まるものと考えられる。

第86号住居址(305・306)

出土遺物は少ない。灰釉陶器碗(306)、土師器杯A(305)のみ図化できた。時期は、資料数が少なく、判然としない。

第88号住居址(307)

須恵器杯B(307)1点のみ図化できた。底部回転ヘラケズリ調整されている。時期は不明である。

第89号住居址(310~312)

土師器甕B(312)・小形甕D(310・311)が出土している。出土数が少なく、時期は不明である。

第90号住居址(308・309)

土師器盤B(309)・杯(308)を図化している。13~14期と考えられる。

第91号住居址(313~321)

須恵器杯A(313・317・318)・杯B(314・315)・稜碗(319)・小形の壺類(321)・甕(320)、黒色土器A杯A(316)が出土している。須恵器が主体の土器群である。杯Aは、すべて回転糸切り痕が残る。杯Bは、314が回転糸切り、315は回転糸切り後ヘラケズリ調整を施している。319は、金属器

模倣の「稜輪型土器」と考えられる。体部中位に突帯状に突出した帯が巡る。口縁部は、ラッパ状に外反する。この「稜輪型土器」については、平城京・長岡京などの宮都をはじめ、越中国・播磨国・武藏国などの官衙関連遺跡からの出土傾向があるとの指摘がなされている⁽¹⁾。316は、黒色土器A杯Aである。底部は、回転糸切りのち手持ちヘラケズリ調整を施している。本址土器群の時期は、5期と考えられる。

第93号住居址(335~337)

須恵器長頸壺(335)、土師器壺A(336・337)が出土している。336の底裏には、木葉の圧痕が観察される。337の体部内外面には、粘土軽輪積み痕が明瞭にみられる。本址土器群の時期は、出土量が少なく判然としないが、壺Aの存在から3期と推定される。

第94号住居址(322~334)

食器具は、灰釉陶器・土師器で構成される。灰釉陶器は、壺(325・328・330・331)が出土している。すべて潰け掛け施釉される。331の口縁内面には、沈線が巡る。325は底部のみ残存している。回転糸切り痕が残る。土師器は、杯A(322~324・326・327)、盤B(329)、壺(332)、小形壺D(333)が出土している。杯は、10.1~10.4cmの小形品と12.4~13.5cmの大形品の2法量みられる。11~12期と考えられる。

第4号建物址(338・339)

P3から黑色土器A杯A(339)、P5から須恵器杯A(338)が出土している。338の須恵器杯Aには、体部と底部に「又」の墨書きがみられる。2点とも底部には、回転糸切り痕が残る。時期は、5~6期と考えられる。

第118号土坑(341~344)

土師器杯A3点(341~343)、灰釉陶器壺(344)が出土している。9期頃と考えられる。

③ 文字關係資料

今回の調査では、墨書き土器が多量に出土している。墨書き土器は、集落を理解するうえで有効な手段としてその重要性が増している。以下、今回出土した39点について検討する。

時期の判明している墨書き土器は計36点である。内訳は、5期12点、6期11点、7期5点、8期6点、11期1点、14期1点である。小原遺跡における墨書き土器の初現は、5期である。該期の墨書き土器が出土する住居址は8軒で、かなり普及が進んでいたと考えられる。6・7期は出土する住居址が限定され、出土点数もやや減少傾向にある。この時期の墨書き土器の特徴は、複数の墨書き土器を出土する住居址(39住の9点、31住4点、35住3点)や同一文字を共有する住居址(39住と40住の「又」)がみられることである。8期では墨書き土器が出土する住居址が減少する。43住からは、「財富加」の特殊な墨書きがみられる。「財富加」は、吉田川西遺跡(文献2)のSB46からも出土しており、遺跡間において特殊な文字が共通してみられることは注目されよう。この文字は、「財」

と「富」とを「加える」ことを願う呪儀に関わるもの⁽²⁾と考えられており、小単位の集落を越えて同様の呪儀を行っている可能性も窺える。また31住と43住にみられる「升」は、芳川小屋地区に寺院があったという言伝えも残っており注目される。9期～10期は、墨書き土器が姿を消す。11期以降は、11期と14期に1点ずつの墨書き土器がみられる。このように9～10期に断絶期があり、11期以降に極少量の墨書き土器がみられる現象は近隣の塩尻市吉田川西遺跡でも報告されている(文献2)。

文献1 長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』

2 長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－塩尻市内その2－ 吉田川西遺跡』

註 1 府中市郷土の森だより「あるむぜお」NO.21「金属器をまねた土器」で、英太郎氏は官衙関連の遺跡からの出土傾向があることと、かなり限られた特殊な用途が考えられることを指摘している。

2 文献2の金原 正氏の考察による。

2 金属製品

(1) 鉄器(図版40・41)

スペースの都合上、詳細は実測図に譲り特徴的なものについてのみごく簡単に触れておく。鉈(2)：72住から1点得ている。遺存状況は良好で、上下を別に作り接合している状況が観察できる。鐸(3～5)：60住から1点、118土から2点得ている。118土出土の2点は舌を残す。いずれも1枚板をまるめ合わせて、上部に穴を開け棒状の舌を固定している。ピンセット状鉄器(6)：上端を欠いており成型法は不明である。鎌(7)：無闇の長頸両丸盤式の鎌と見られるが、鎌身部がかなり厚く、工具類の可能性も考えられる。季引鉄(8～11)：4点出土しているが、残存度は悪く完形のものは1点もない。紡錘車(12・13)：紡輪と紡軸が1点ずつ出土しているほか、径37mm程度の小さい径をもつ円盤型の製品(42)がある。刀子(14～21)：8点出土しているが、完形品はない。両側をもつものの1点、棒側に間をもつものの2点を確認した。鎌(22)：1点出土しており、両端をわずかに欠く。取付部の折り返しが逆に付き、左利き用のものと考えられる。工具(23)：鍔 鋸の先端部が1点出土している。釘(24～27)：角釘4点が出土している。楔(28)：短冊状のものが1点出土している。不明品(29～42)：棒状のもの7点、板状のもの6点、環状のもの1点を不明品として扱った。29は楔、39は鎌の可能性が考えられる。30はほんの90°の折れが確認できる。36は中央付近に環が回る。ほかに59住・94住から鍛冶滓とみられる槌状の鐵滓が出土している。小鍛冶の存在が考えられる。

(2) 銅製品(図版41)

鉄具(1)：39住から棒部を欠いたものが1点出土している。刺金部は軸と一体の作りで、棒にはめ込む突起部を欠いている。全体に後が認められ、刺金部先端の棒に接する部分は欠き取り加工されている。小形で残存軸幅25mm、刺金長26mmを測るが、全体の形状は不明である。

3 錢貨(図版42・43)

15区南東隅のピットから2701枚の渡来銭が出土したほか、15区60住から1枚(不明1)、同6堅から4枚(大觀通宝2・景德元宝1・熙寧元宝1・不明1)、14区119土から10枚(元豐通宝2・大觀通宝2・祥符元宝2・皇宋通宝2・治平元宝1・永樂通宝1)、同103土から2枚(祥符元宝1・元祐通宝1)の合計2711枚を得ている。このうち15区ピットの埋納銭について記述しておく。

埋納銭の錢種は52種におよび、鋳造期間は初鋳年から見るとおよそ700年にもわたる(表3参照)。これらの基本銭は唐代から元代にかけての渡来銭であるが、模鋳銭がかなり含まれており年代決定はできない。出土枚数が200枚をこえる種類が5銭種あるが、うち熙寧通宝を除く開元通宝・皇宋通宝・元豐通宝・元祐通宝の4種は模鋳銭の鋳造が多いことでも知られている。ただ非常な流通を見、我が国でも盛んに鋳造された明銭の永樂通宝が1枚も出土していないことから15世紀以前という時期が想定される。埋納容器はわずかに残った繊維から、袋状の入れ物に入っていたことが想像される。銭は整然とした出土状況から「サシ」状態で埋納されていたものと考えられるが、括りのヒモノの遺存状態が悪く、「サシ」の枚数が確認できたものは4例にすぎない。その枚数は93枚・97枚・101枚・103枚とやや開きがある。

松本市内での埋納銭の出土例は、わずかに明治6年の信飛新聞に里山辺藤井地区の6400余枚が記録に残るので、今後の課題とされるところが大きい。

表3 埋納銭銭種一覧

No.	No.	錢種名	初鋳年	王朝	枚数	No.	錢種名	初鋳年	王朝	枚数	No.	錢種名	初鋳年	王朝	枚数		
1	1-9	開元通宝	621	唐	239	19	40-41	至和元宝	1054-55	宋	34	37	96	正隆元宝	1161-78	金	6
2	10-11	乾元重寶	758	唐	10	20	42-43	至和通宝	1054-55	宋	8	38	97-101	淳熙元宝	1174	南宋	14
3	12	景德元宝	919	前蜀	2	21	44-45	嘉祐元宝	1056	宋	29	39	102-103	紹熙元宝	1190	南宋	5
4	13	周元通宝	955	後周	1	22	46-49	嘉祐通宝	1056	宋	77	40	104-106	慶元通宝	1201	南宋	4
5	14	唐國通宝	959	南唐	2	23	50-51	治平元宝	1064	宋	47	41	107	嘉泰通宝	1205	南宋	5
6	15	宋通元宝	968	宋	17	24	52	治平通宝	1064	宋	5	42	108	開禧通宝	1208	南宋	3
7	16	太平通宝	976	宋	18	25	53-63	熙寧元宝	1068	宋	253	43	109-113	嘉定通宝	1208	南宋	9
8	17-19	淳化元宝	990	宋	18	26		熙寧通宝	1068	宋	2	44	114-115	紹定通宝	1228	南宋	6
9	21	至道元宝	995	宋	57	27	64-66	元豐通宝	1078	宋	327	45	116	嘉熙通宝	1237	南宋	1
10	22	咸平元宝	998	宋	56	28	67-70	元祐通宝	1086	宋	257	46	117-118	淳祐元宝	1241	南宋	2
11	23	景德元宝	1004	宋	49	29	71-75	紹聖元宝	1094	宋	100	47	119	皇宋元宝	1253	南宋	1
12	26	祥符元宝	1008	宋	80	30	76-79	元符通宝	1098	宋	36	48	120	開慶通宝	1259	南宋	1
13	24-25	祥符通宝	1008	宋	38	31	80-85	聖宋元宝	1101	宋	104	49	121-123	景定元宝	1260	南宋	8
14	27	天禧通宝	1017	宋	55	32	86	崇寧重寶	1102	宋	1	50	124	咸淳元宝	1265	南宋	4
15	28-29	天聖元宝	1023	宋	128	33	87	大觀通宝	1107	宋	22	51	125	至大通宝	1310	元	1
16	30-31	明道元宝	1032	宋	20	34	88-91	政和通宝	1111	宋	108	52	126	景元通宝	?	?	1
17	32-33	景德元宝	1034	宋	39	35	92-94	宣和通宝	1119	宋	13			錢種不明			9
18	34-39	皇宋通宝	1039	宋	366	36	95	建炎通宝	1127	南宋	3			合計	2701		

第三章 調査のまとめ

2次にわたる小原遺跡の調査により、従来不明であった芳川地区の古代集落の様相が明らかになりつつある。ここでは紙幅の関係もあり、また近接地においてさらに調査が予定されているため、中間報告として以下調査により明らかになった点を時代毎に列挙し、今後の課題を記して結びとしたい。

1 編文時代

晩期終末期の大型壠が出土した。これは棺として用いられたものが平安時代の住居構築の際破壊されたものと推察され、近接する高畠遺跡における土器棺墓や里山辺針塚遺跡の再葬墓群も含めて当時の墓制を考える上で好資料を提供した。さらに小原、高畠、百瀬遺跡と隣接する微高地、段丘上に晩期遺跡の存在が明らかとなり、居住、生産等不鮮明な当該期の景観を復原する上で良好な資料となりうる。今後それぞれの遺跡における、より具体的な集落内容の把握が要求される。

2 奈良・平安時代

90棟を超える住居址の検出をみた。時期別に分布を見ると主体となる5~8期の住居址は全域で見られ、北側ほど密度を増す。特に14区ではほとんどの住居址が重複し、非常に高密度である。集落の中心に近い位置であろう。9~10期といったん集落が断絶した後、11~14期において再び居住活動が行われるが、中心は南に移り、15区付近に遺構が集中、集落は縮小される。この集落の動き、特に9~10期における断絶が何を物語るのか、今後の課題である。

本遺跡周辺を見ると、北方、平田本郷遺跡では同時期の住居址94棟、また南方、吉田川西遺跡においては266棟と3遺跡合せて450棟もの住居址が検出されている。奈良井川と田川に挟まれた長大なこの地の開発、集落の繁栄をもたらした背景、文献にみえる良田郷の実態や東山道覚志駅との関係を語る上で欠かせない資料を追加したことになる。

多量の出土土器は当地域的一般的な方と共通する。しかし、後半期の集落においては壺・羽釜等煮炊具に甲斐地方の形態・技法を踏襲したと考えられる土器(保坂康夫氏の教示によると胎土の特徴は甲斐地方のそれと異なるようである。肉眼で見る限りでは在地産の土器に近い。)が顕著に見られ、地域間の活発な交流を想起させる。

文字資料、特に墨書き器の多さも本遺跡を特色付ける。1次調査出土の円面硯と合わせ、前半期における集落内への文字の普及を思わせる。特に「又」の墨書きが目立ち、平田本郷遺跡の「几」、三間沢川左岸遺跡の「王」等とともにこれが屋号や集落を表すものとして用いられたのか検証を要する。

信仰、あるいは宗教に関わる遺物が目立った。墨書き器では「財富加」に吉田川西遺跡等も含め当時のこの地域に同様な呪儀が行われていた可能性を示し、民衆の願いが伝わってくる。「卍」も何か宗教的なものを感じさせる。鉄製品では鉄鈴、3点の鉄鐸が見られた。鈴は金銅製のものが吉田川西遺跡より、また銅製のものが佐久市聖原遺跡から出土しているが、集落内より出土する事例は非常に珍しい。鉄鐸2点は墓と考えられる第118号土坑内より出土した。生前被葬者が使用していたものであろうか、土坑墓内からの出土例としては茅野市御狩野遺跡が他に存在する。なお平安時代の墓と考えられるものは本土坑1基のみであり、鉄鐸の出土とあいまって被葬者の性格を物語る。

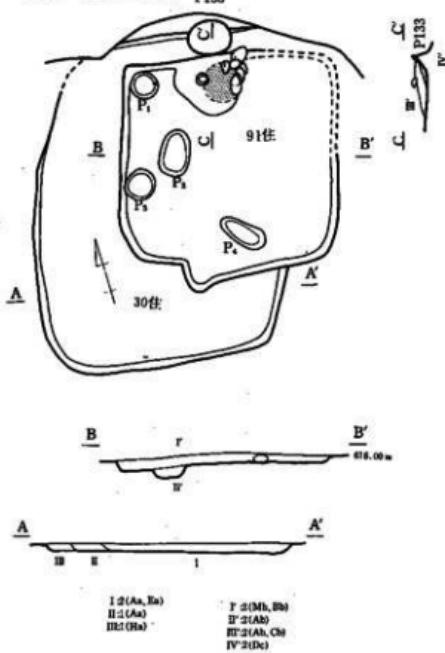
3 中世

検出された遺構は中世の集落、墓域に関わるものと推察される。その分布状況については既に述べたところであるが、15区南西部に墓と推定される土坑が集中する。居住域としては15区北西部～南東部が考えられる。集落や墓址の具体的な年代は今次調査では出土遺物が少ないため判然としないが、1次調査の所見では13～14世紀を中心とした時期が導かれている。

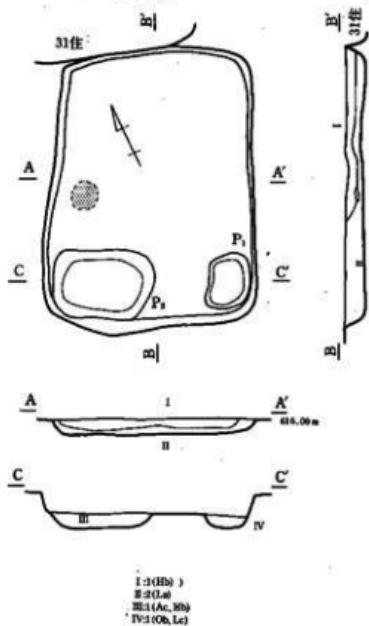
注目すべき発見として埋納錢の検出があげられる。錢は布に包んだか袋に入れ埋納されたものと考えられ、差しの状態が確認された。錢種の分析から導かれた14世紀前半の年代はこの種の遺構としては古い段階に位置付く。松本市内においては里山辺藤井例がやはり古い段階のものとして知られるが、資料が現存しないため詳細不明である。近在における埋納錢の出土例としては塩尻市広丘吉田の若宮遺跡があり、74,000枚が出土している。近年問題にされる「差し」の枚数は判明するものが少なく、100枚前後で一定の傾向を示さなかった。また從来から指摘されている備蓄としての性格に加え、近年儀礼に関わる埋納とする見解も存在するがそれを特定するには至らない。ただ検出地点周辺にはやはり13～14世紀代と考えられる堅穴状遺構、土坑等が集中しており、集落内に埋納されたことは間違いないであろう。

最後に、本調査に際して多大なご理解とご協力をいたいた芳川地区土地区画整理組合、芳川公民館ならびに地元芳川区民の皆様に感謝の意を表して結びとしたい。

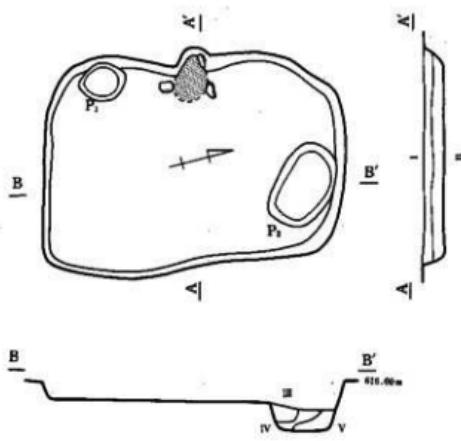
第30·91号住居址 P133



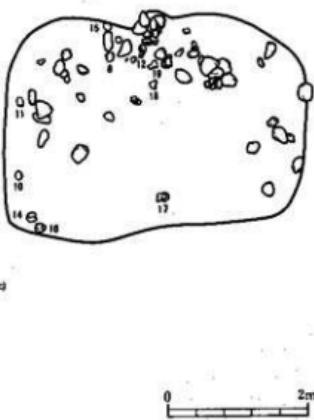
第33号住居址

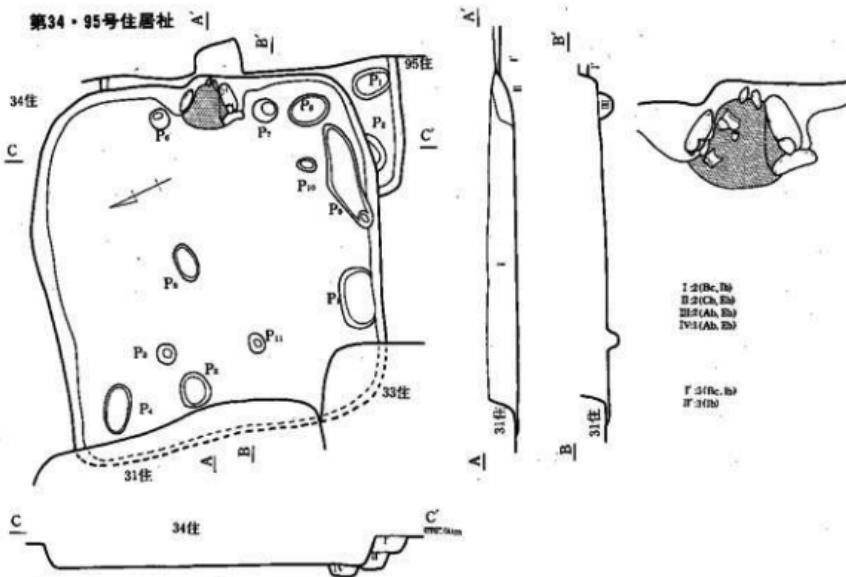


第31号住居址

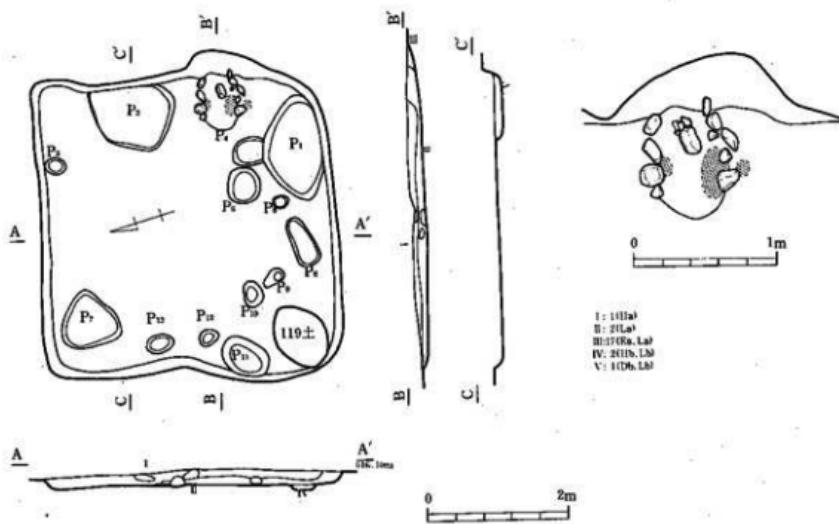


遗物出土状况

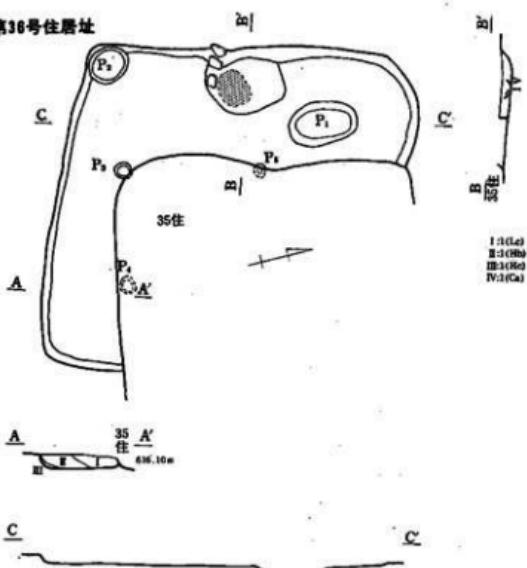




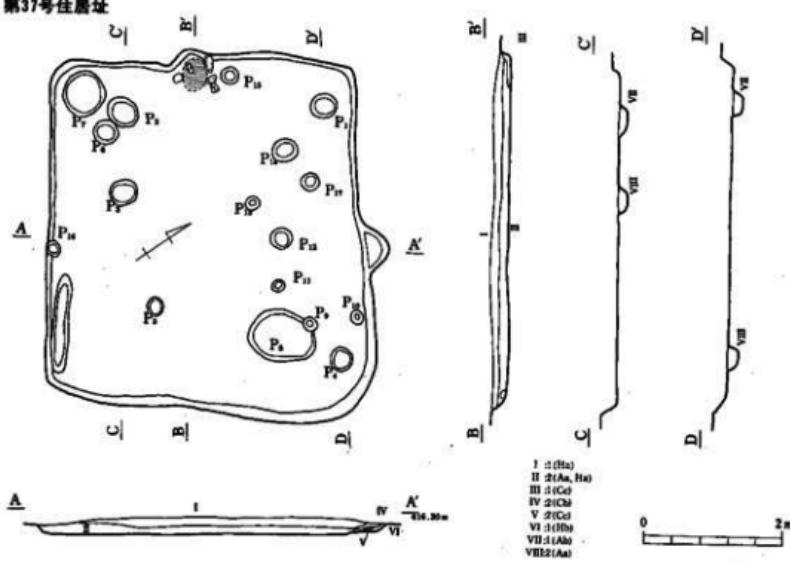
第35号住居址



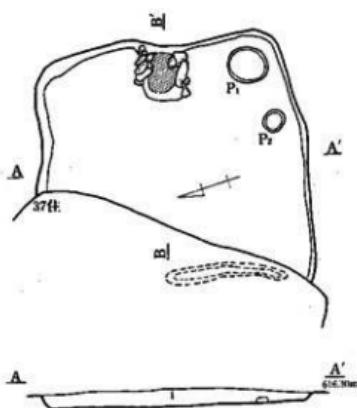
第36号住居址



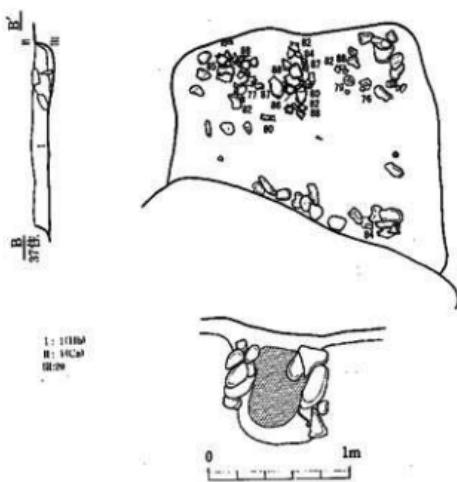
第37号住居址



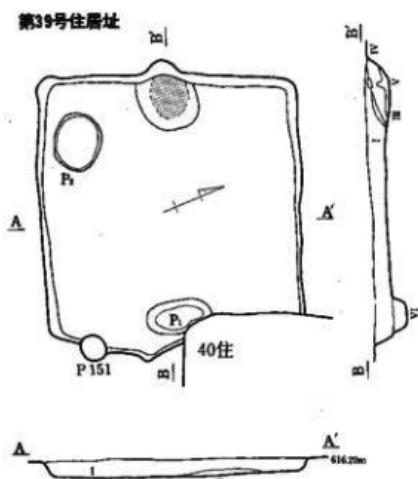
第38号住居址



遗物出土状况

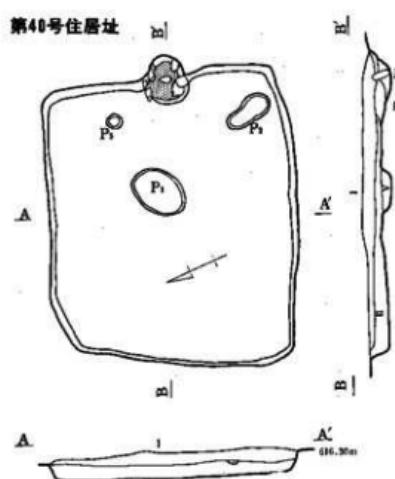


第39号住居址



I: 2(Aa)
II: 2(Ba)
III: 2(Ca)
IV: 2(Da)
V: 2(Ea, Eb)

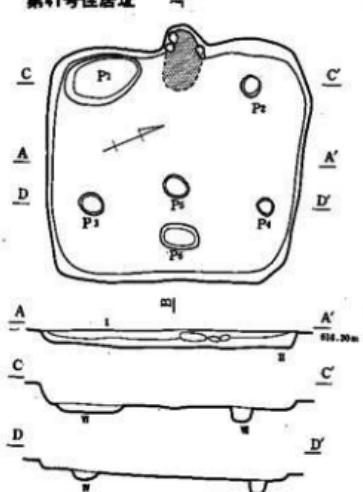
第40号住居址



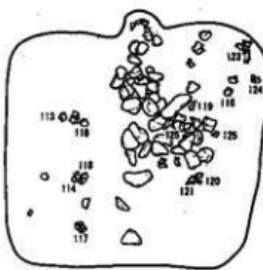
I: 2(Aa)
II: 2(Aa)
III: 2(Cb)
IV: 2(Dc)
V: 2(Ad)

0 2m

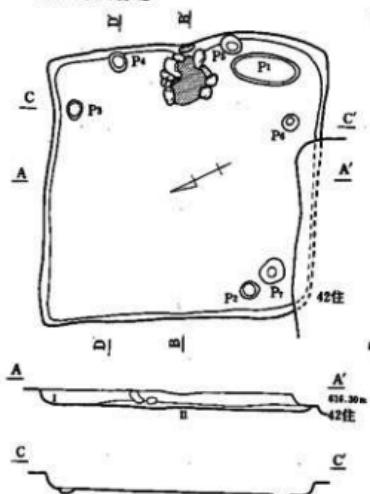
第41号住居址



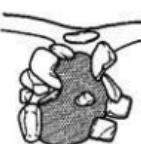
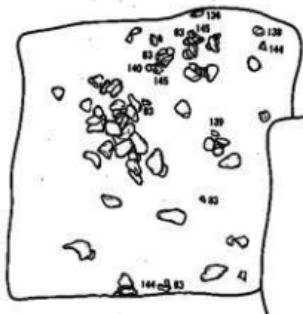
遗物出土状况



第43号住居址

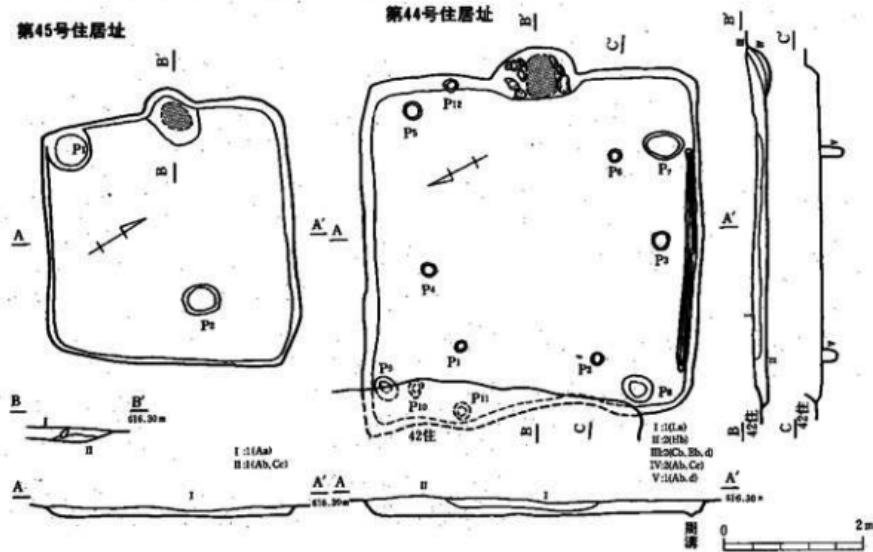
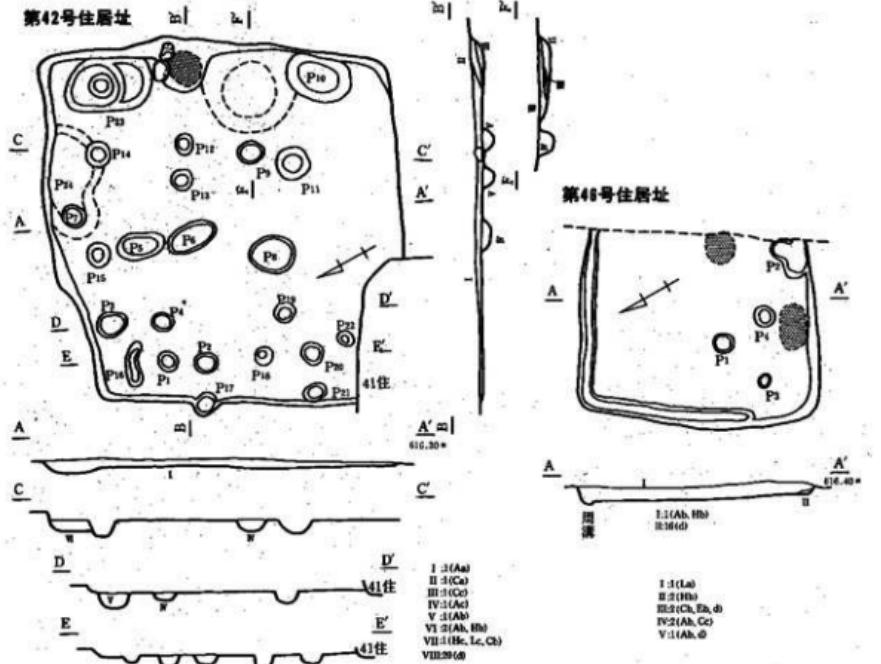


遗物出土状况

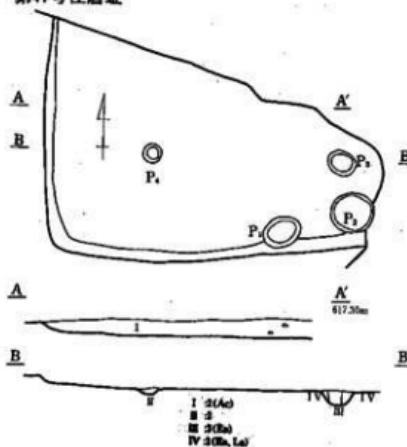


0 2m

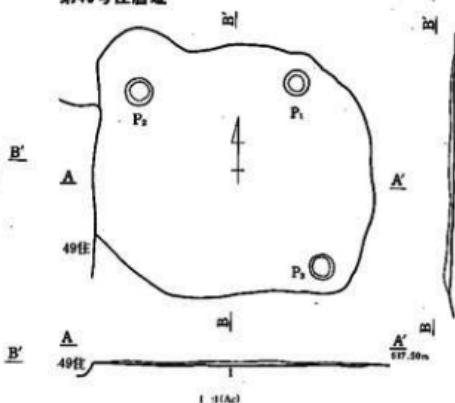
0 1m



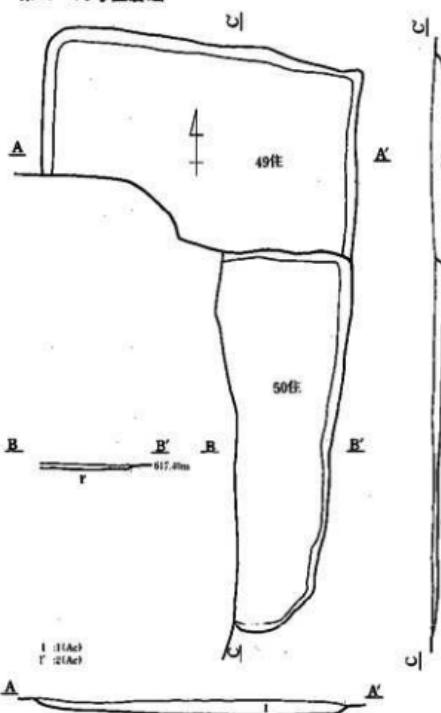
第47号住居址



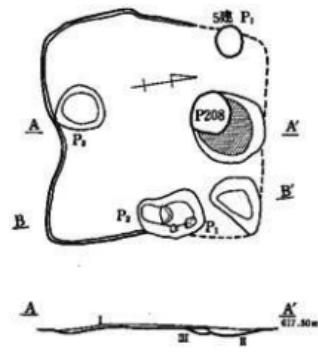
第48号住居址



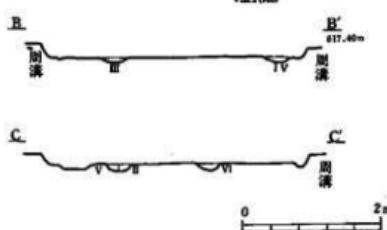
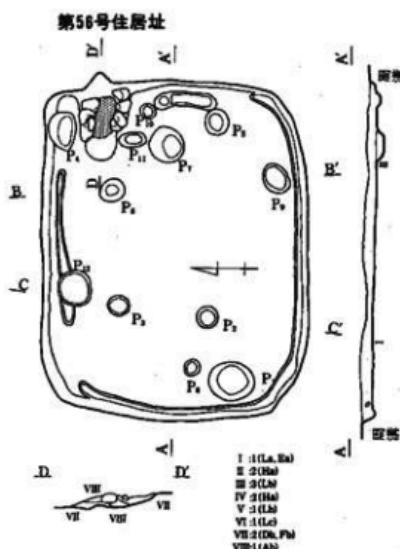
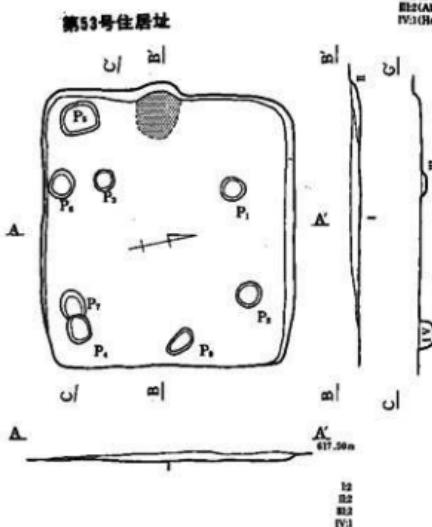
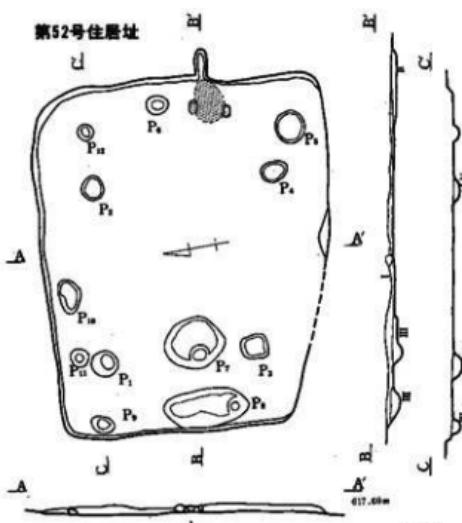
第49・50号住居址

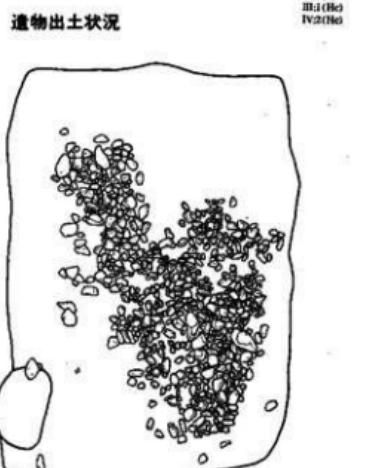
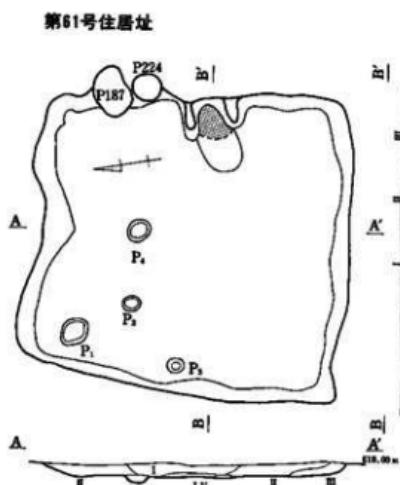
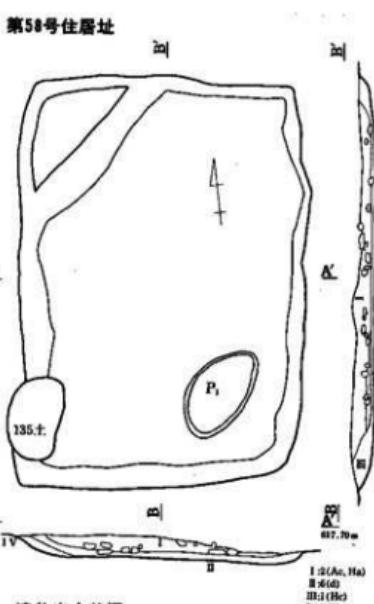
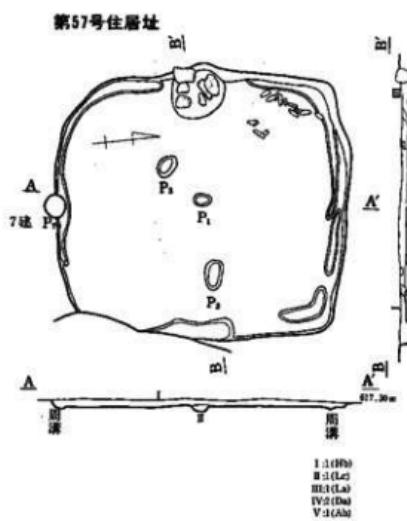


第51号住居址



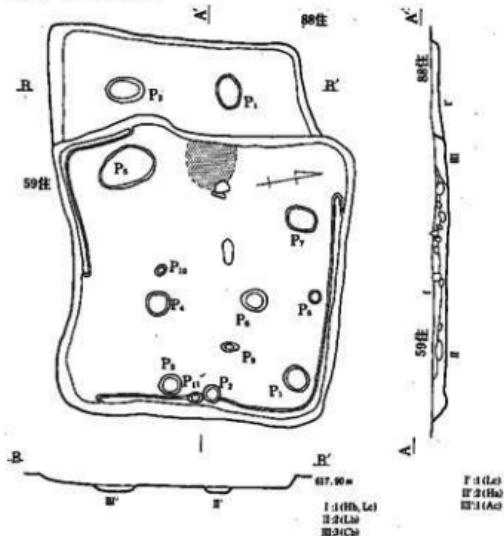
0 2m



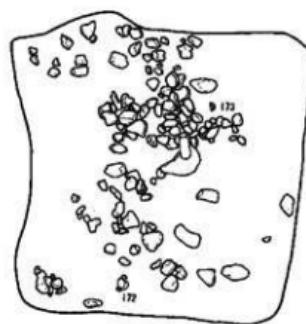


I : 2(He, Lb)
II : 2(Lb, Hb)
III : 2(Ca, La)
IV : 1(Ca, Fe)
V : 27(Eb)
VI : 6(Fa)
VII : 1(Ha)

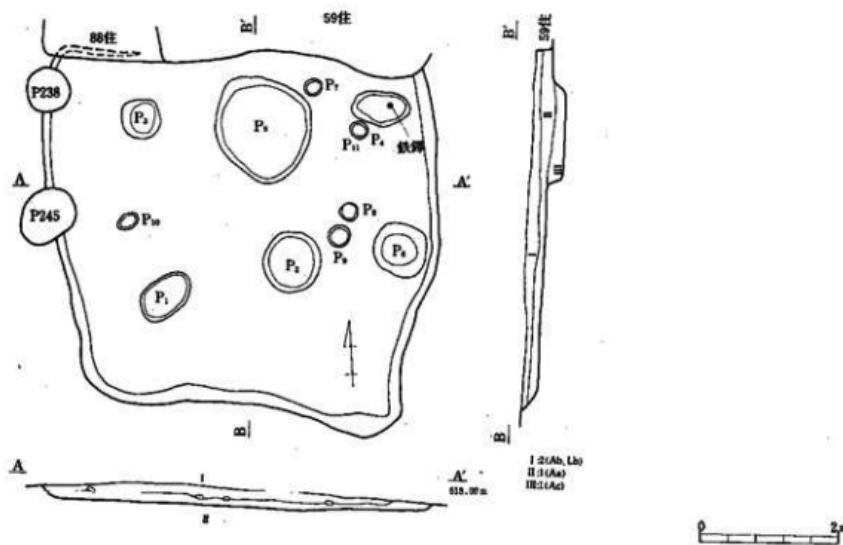
第 59、60 号住居址

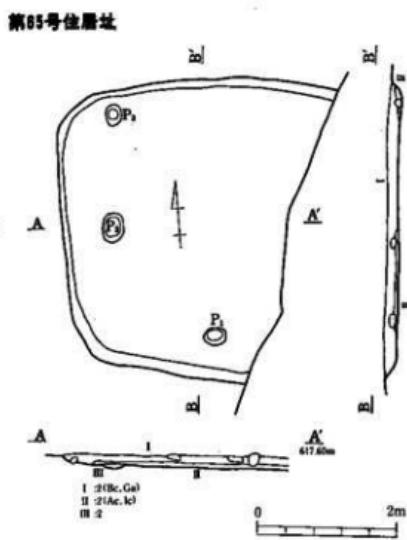
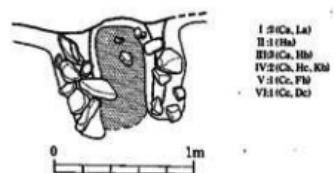
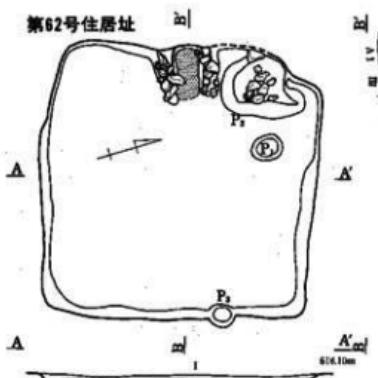


遗物出土状况

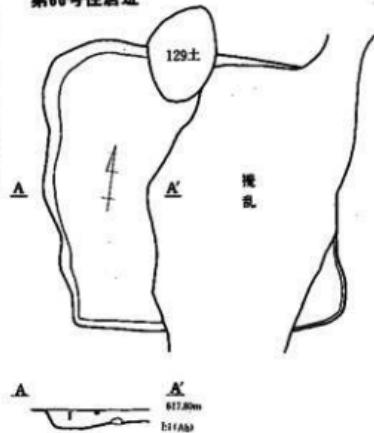


第 60 号住居址

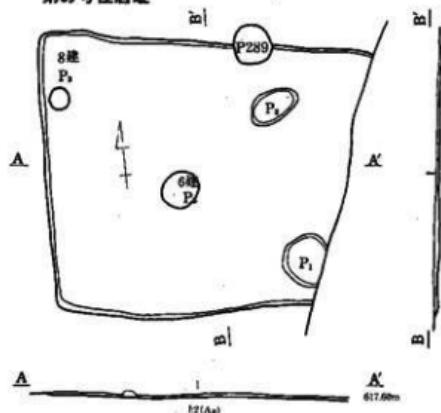




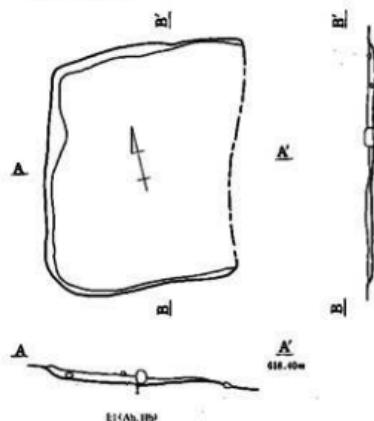
第66号住居址



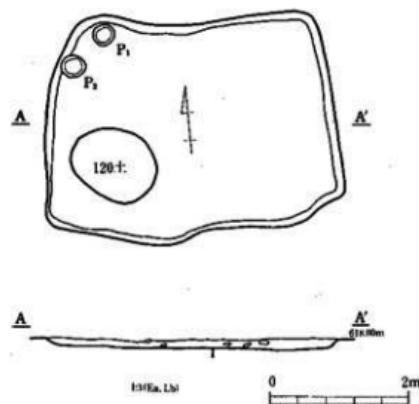
第67号住居址



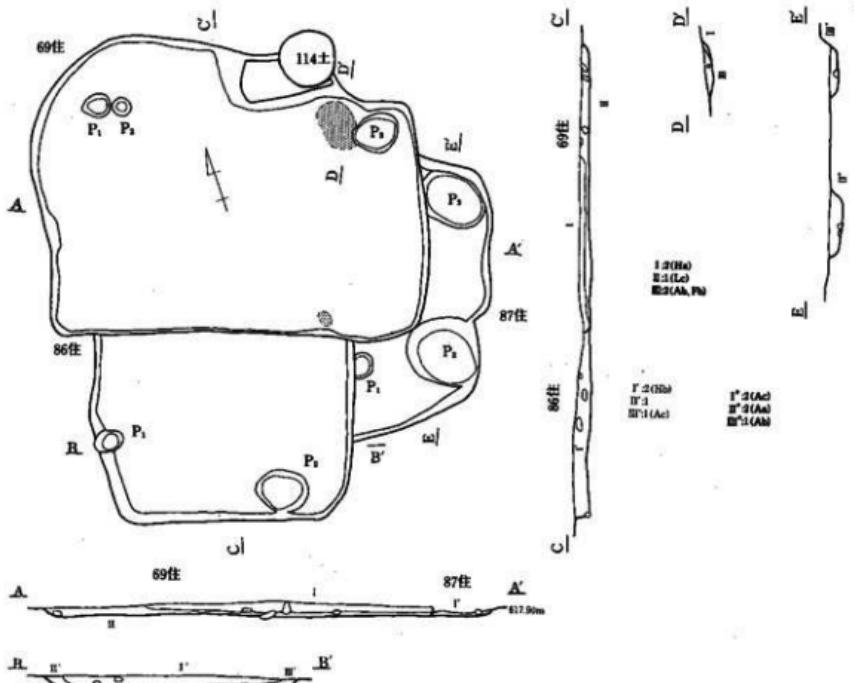
第68号住居址



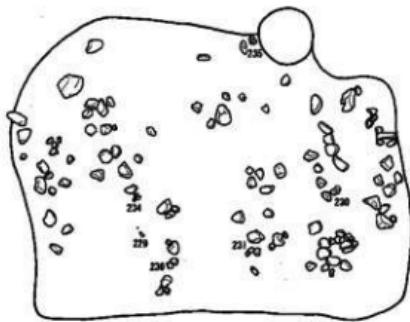
第70号住居址



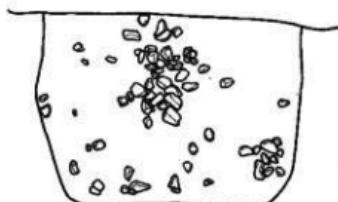
第68·86·87号住居址



69住遺物出土狀況

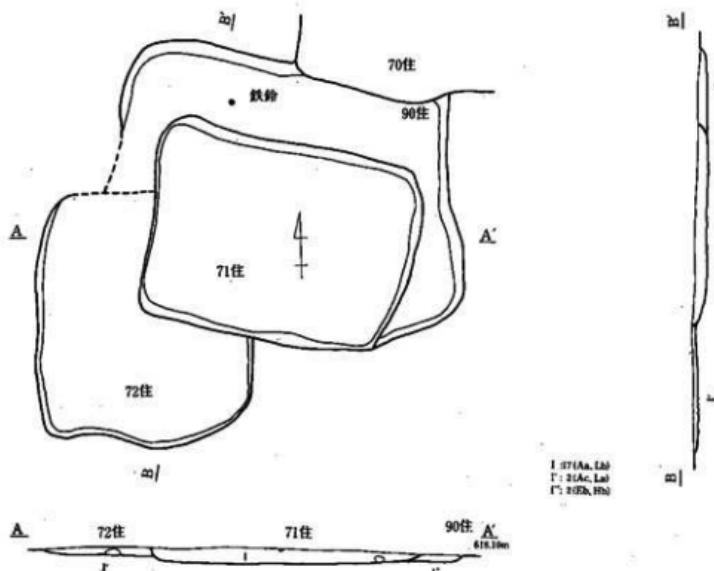


86住遺物出土狀況

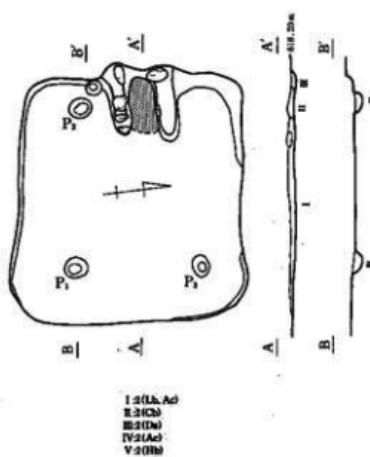


0 2m

第 71·72·90 号住居址



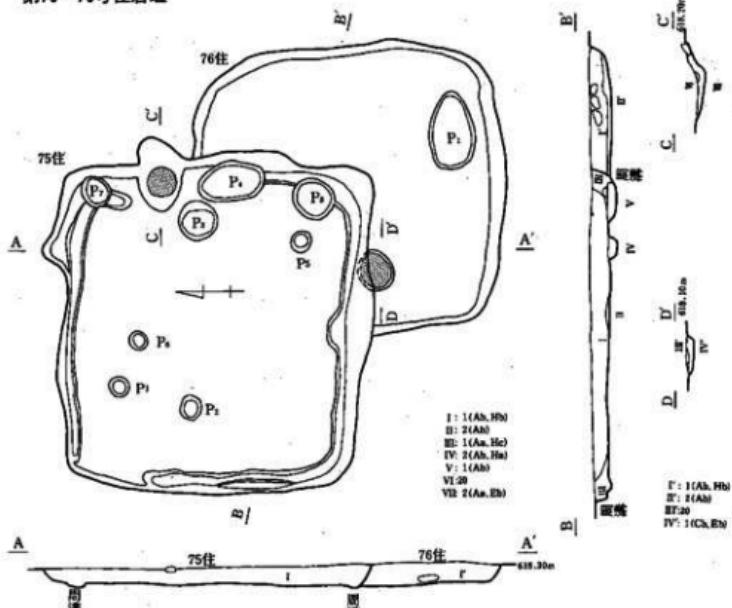
第 73 号住居址



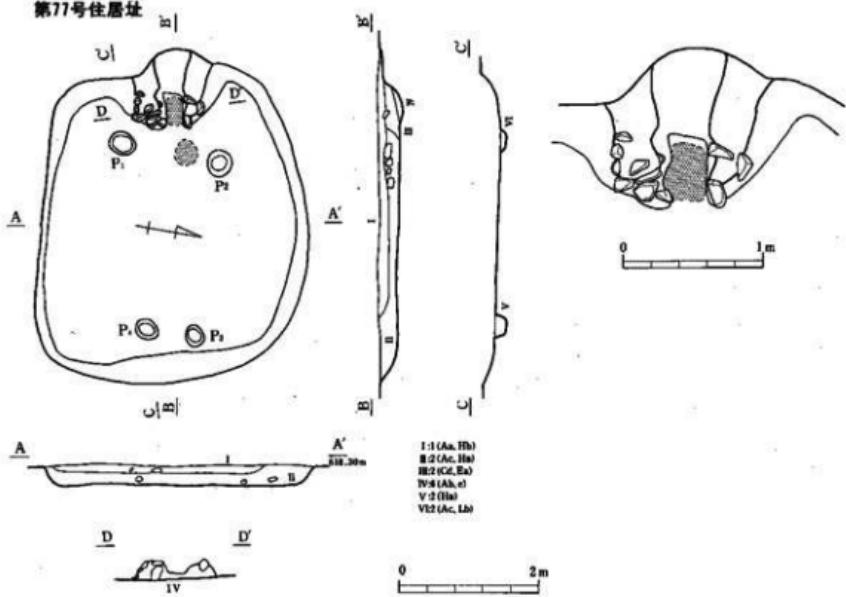
第 74 号住居址



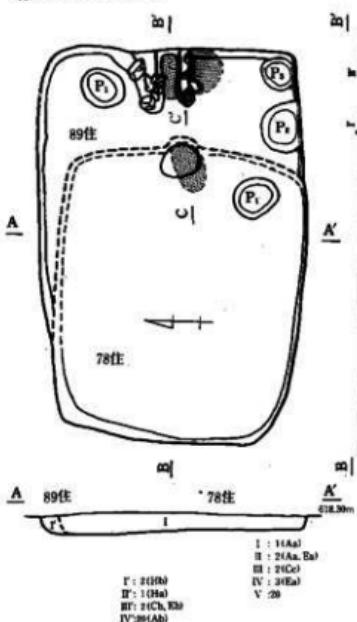
第75・76号住居址



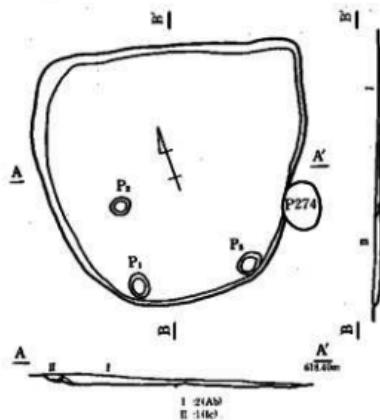
第77号住居址



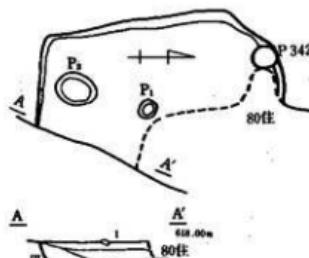
第 78 · 89 号住居址



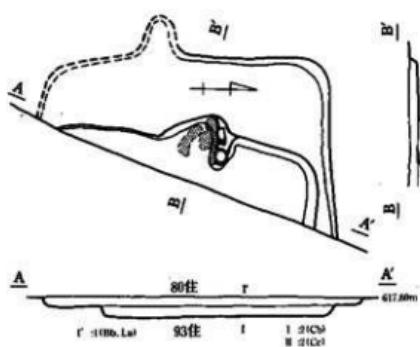
第 79 号住居址



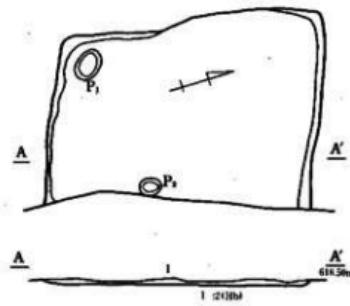
第 81 号住居址



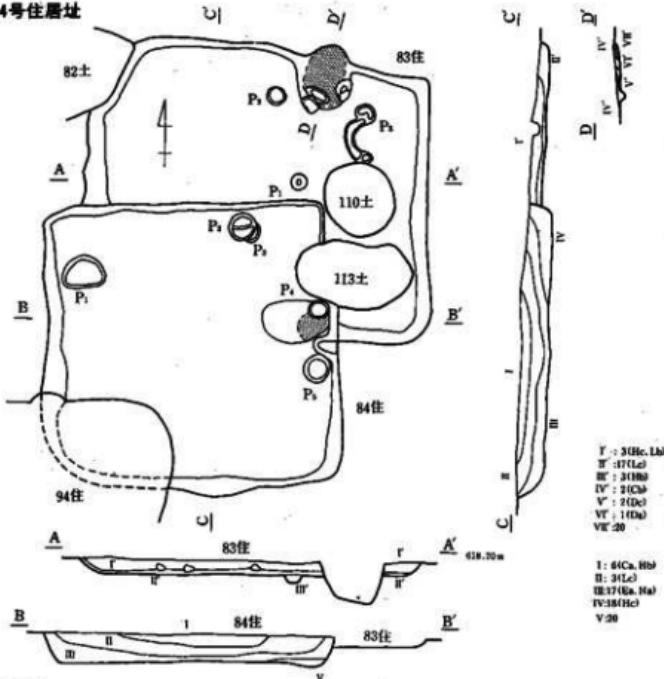
第 80 · 93 号住居址



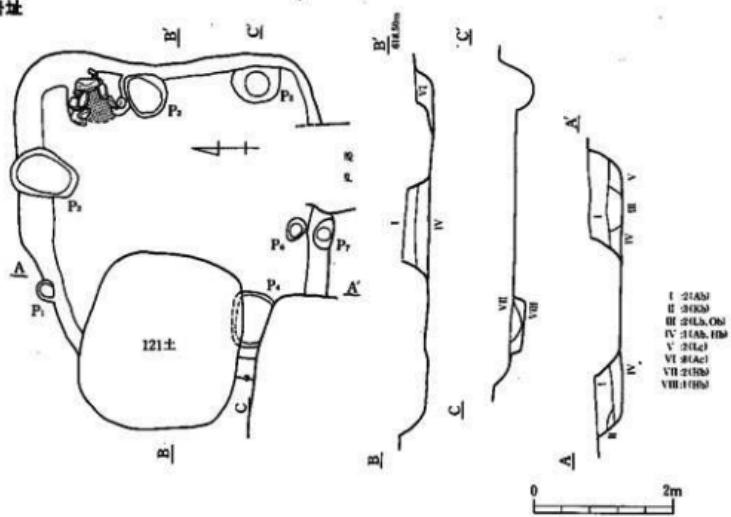
第 85 号住居址



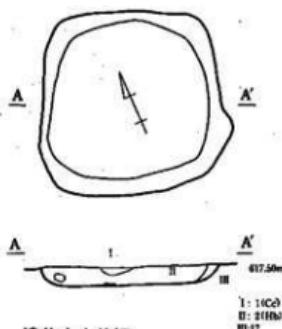
第83・84号住居址



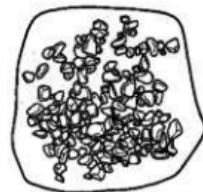
第84号住居址



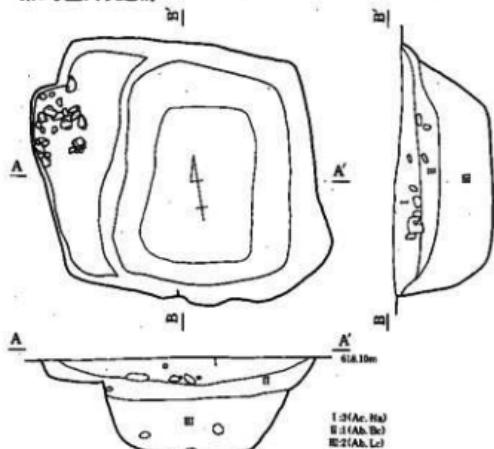
第 5 号竖穴状遗构



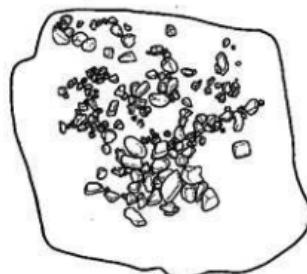
遗物出土状况



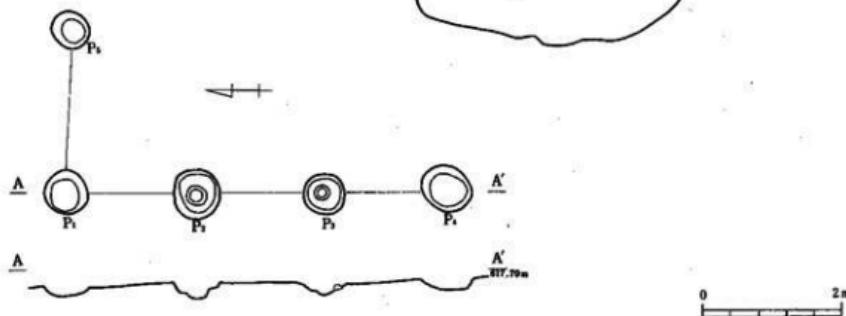
第 6 号竖穴状遗构



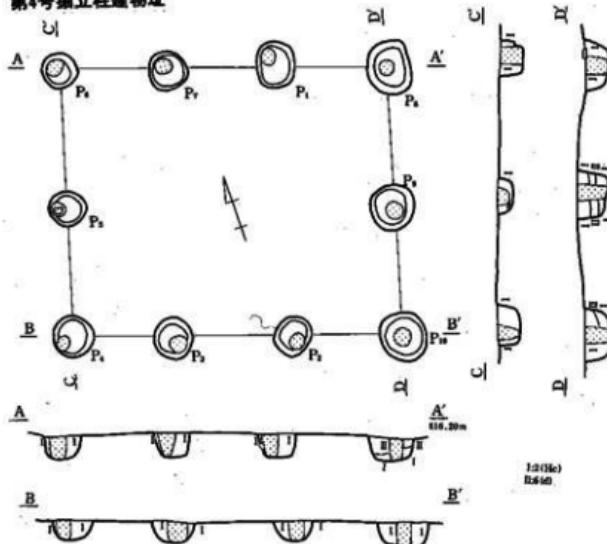
遗物出土状况



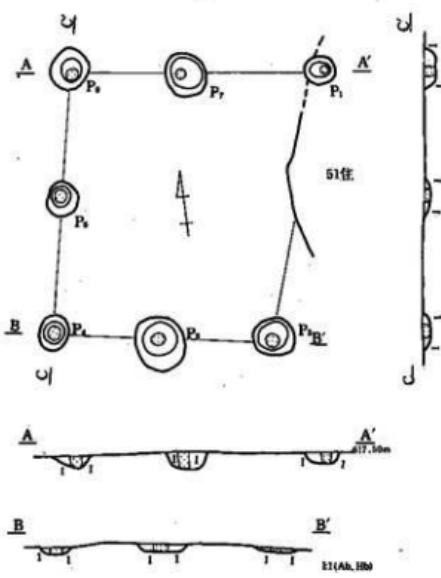
第 6 号插立柱建筑物址



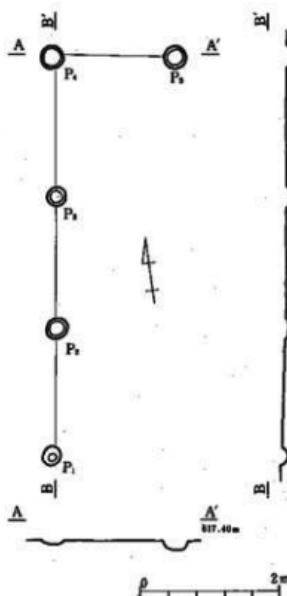
第4号掘立柱建物址



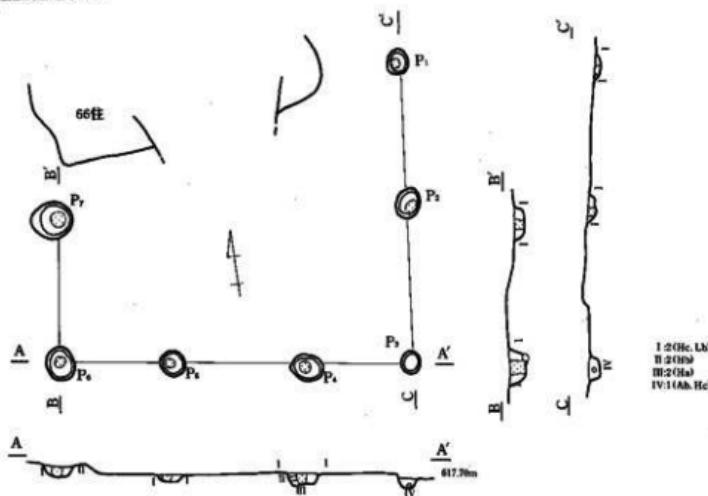
第5号掘立柱建物址



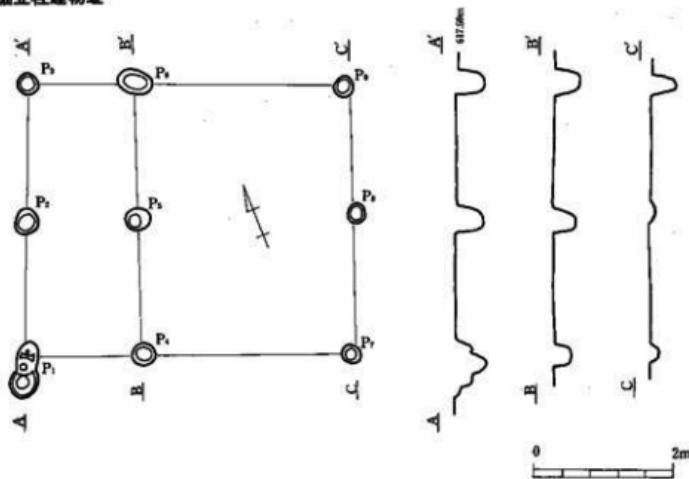
第7号掘立柱建物址



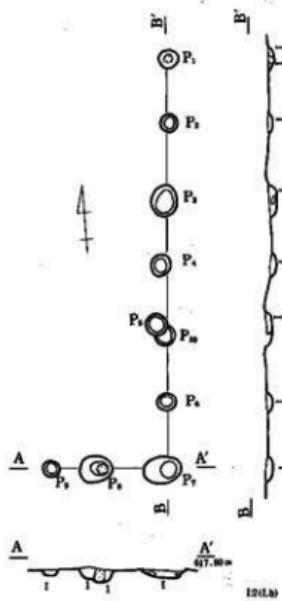
第8号掘立柱建物址



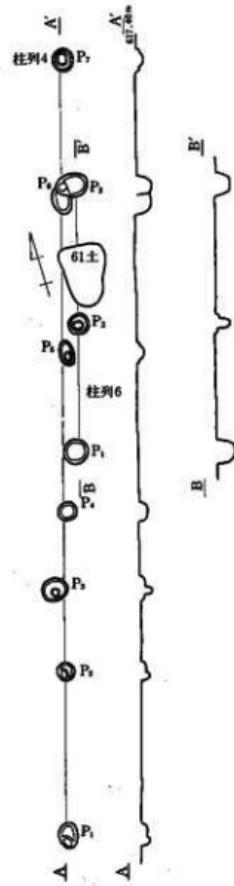
第9号掘立柱建物址



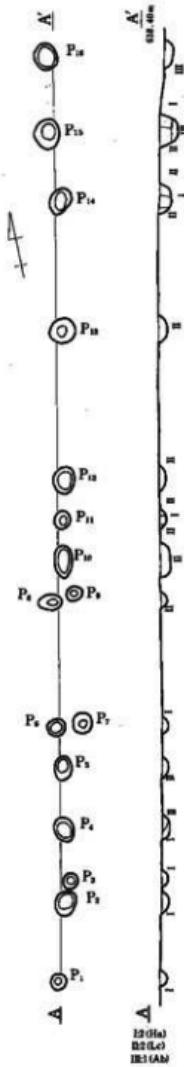
第5号柱穴列



第4、5号柱穴列

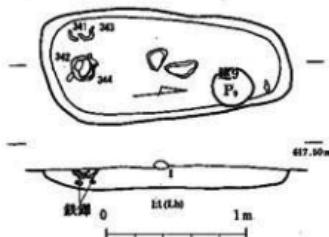


第7号柱穴列



0 2m

第118号土坑



第103号土坑



第112号土坑

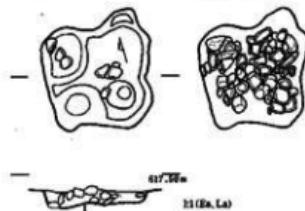


遺物出土狀況

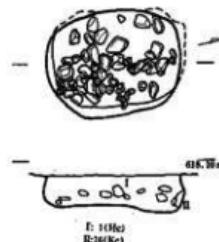


第60号土坑

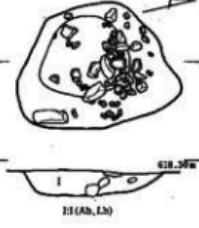
帶出土狀況



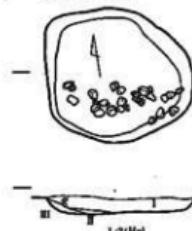
第75号土坑



第34号土坑



第89号土坑



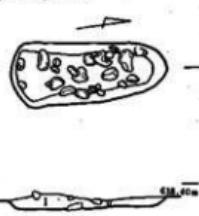
第90号土坑



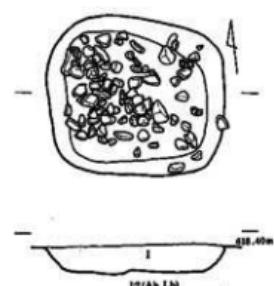
第93号土坑



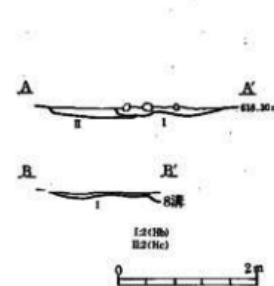
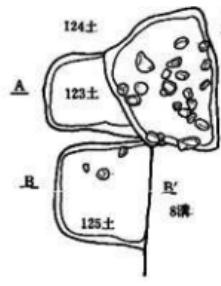
第101号土坑



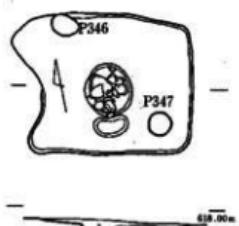
第121号土坑



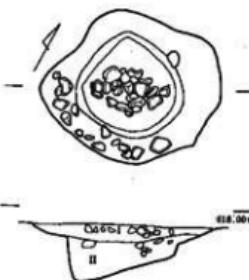
第123·124·125号土坑



第76号土坑



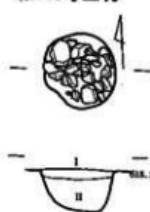
第105号土坑



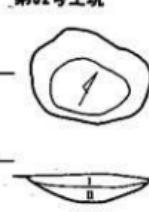
第70号土坑



第110号土坑



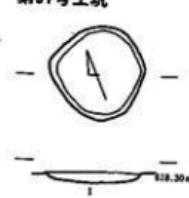
第82号土坑



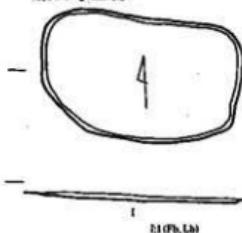
第88号土坑



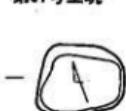
第91号土坑



第85号土坑



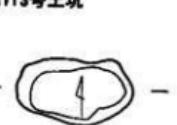
第97号土坑



第108号土坑



第113号土坑



第115号土坑



第116号土坑

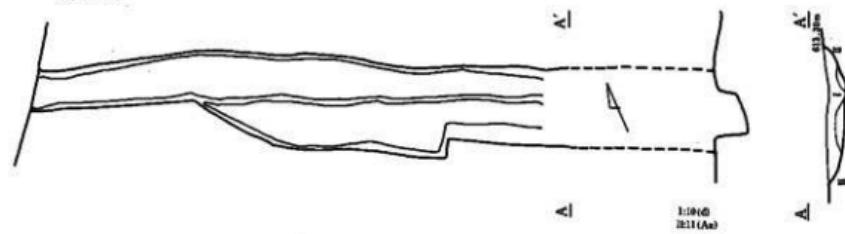


I:2(Ba, Lc)
II:3(Ae, Lc)
III:2(Ae, Lc)

I
II (Ba)

III
II
III
I 2(Ba)
II 3
III:2(Ba, Lc)

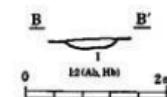
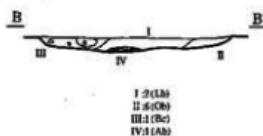
0 2m

溝状遺構
第6号溝

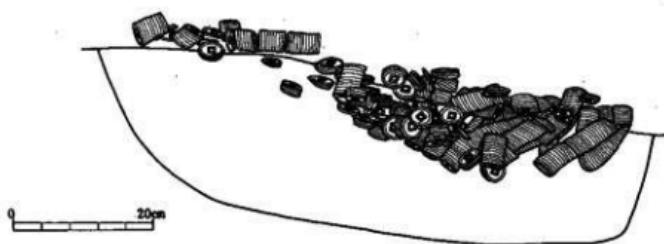
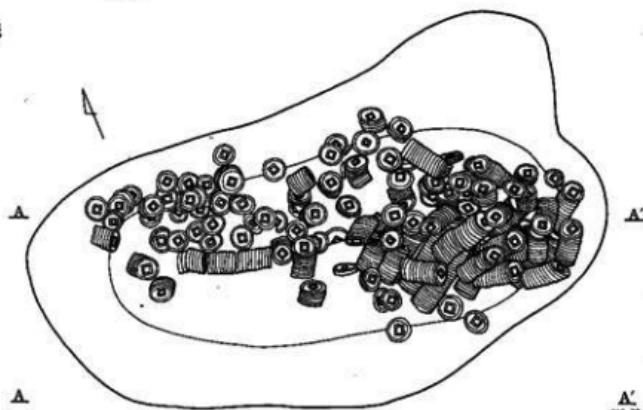
第7号溝



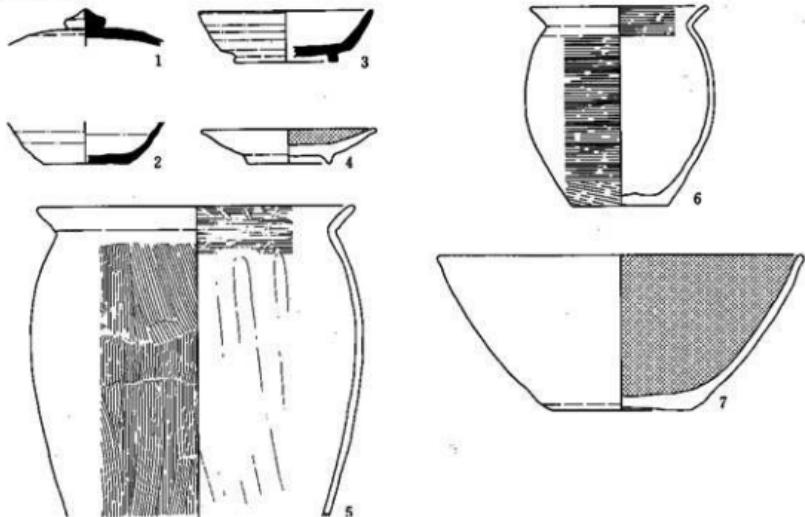
第8号溝



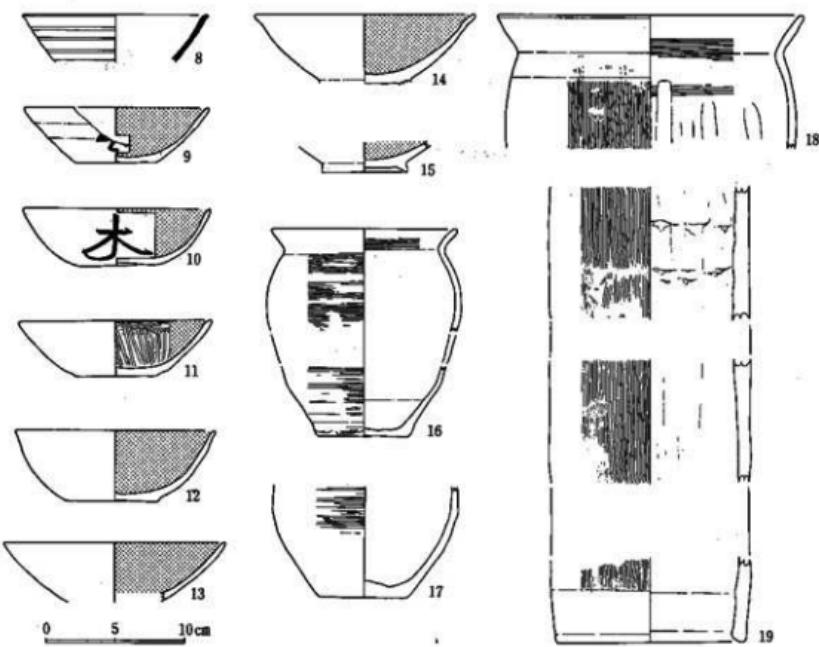
埋納鉢



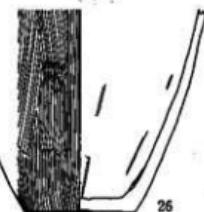
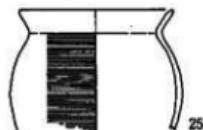
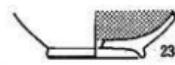
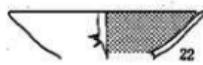
第30号住居址



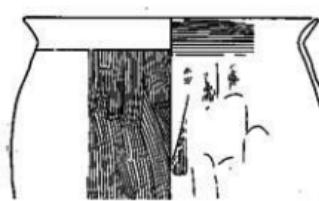
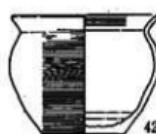
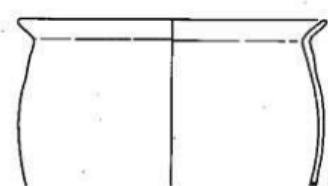
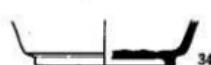
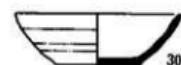
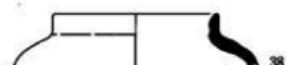
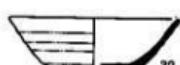
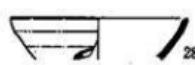
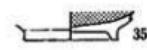
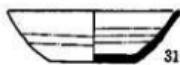
第31号住居址



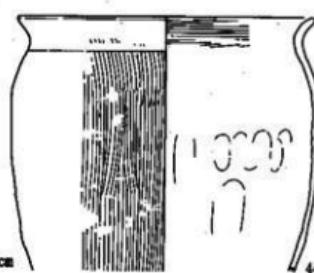
第33号住居址



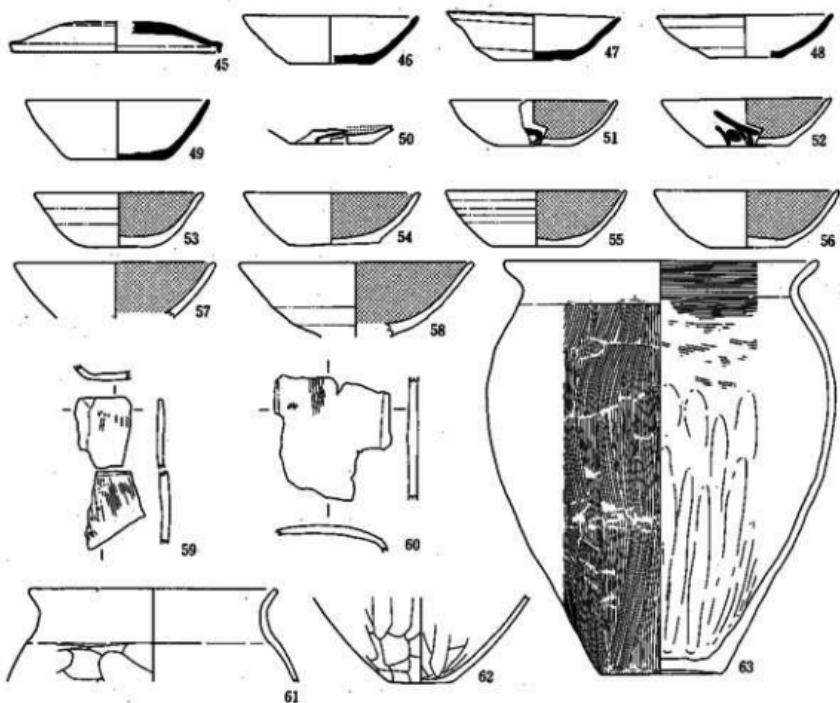
第34号住居址



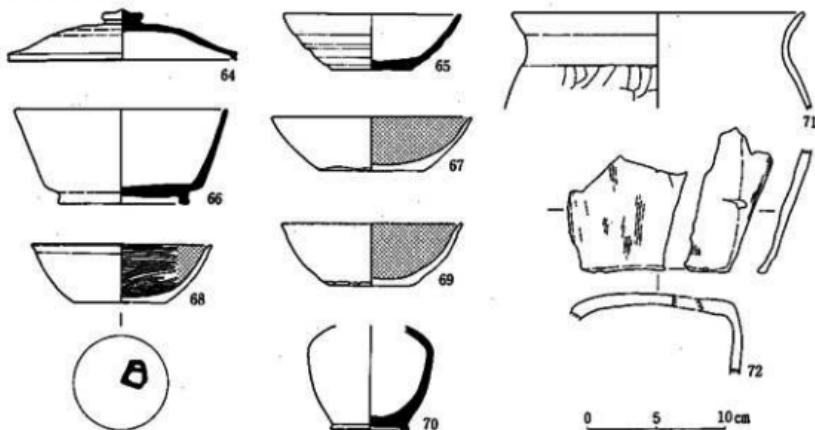
0 5 10 cm



第35号住居址



第36号住居址



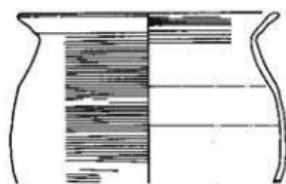
第37号住居址



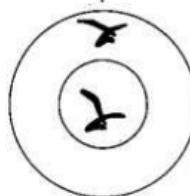
73



74



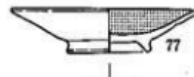
75



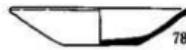
第38号住居址



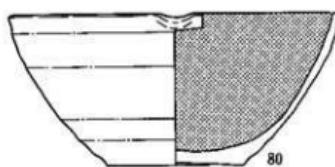
76



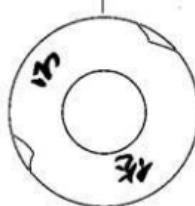
77



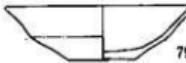
78



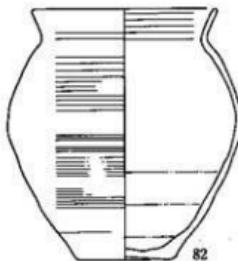
80



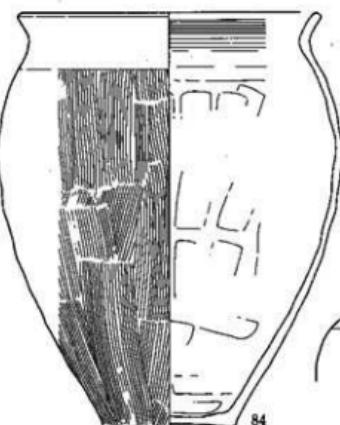
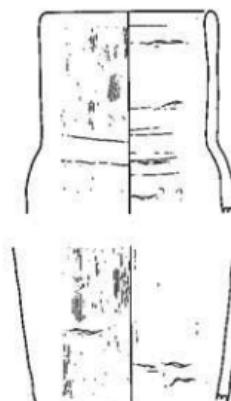
79



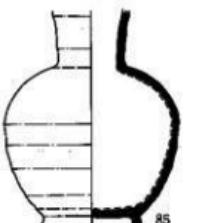
81



82



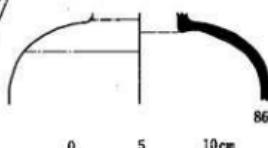
84



85

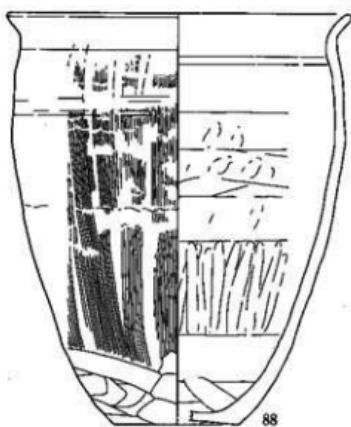
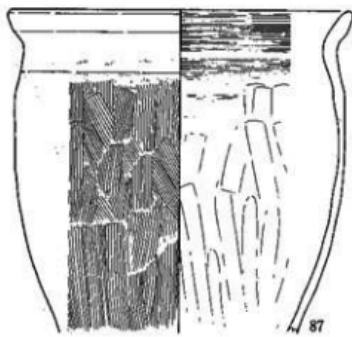


83

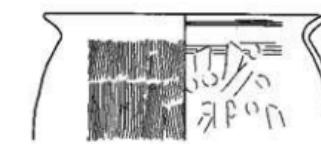
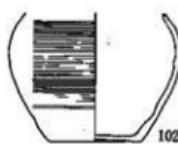
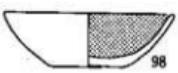
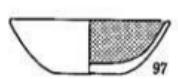
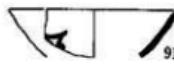


86

0 5 10 cm

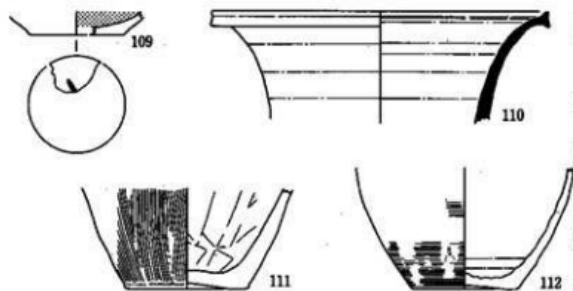
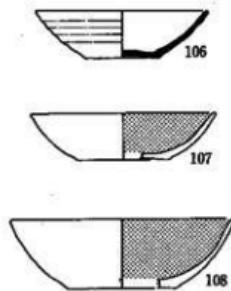


第39号住居址

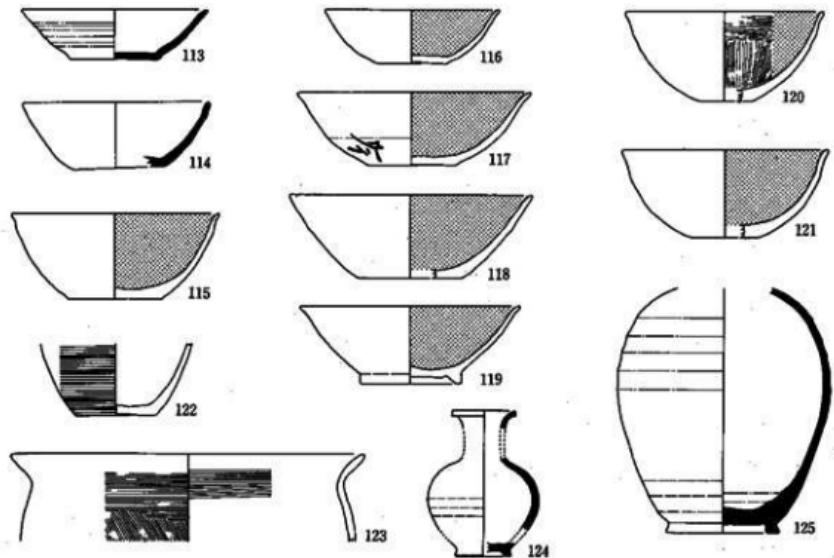


0 5 10cm

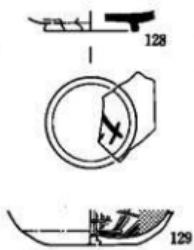
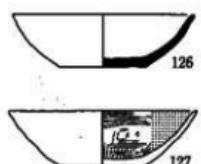
第40号住居址



第41号住居址



第42号住居址

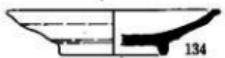


0 5 10cm

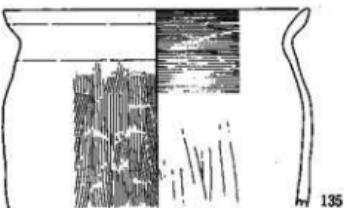




133

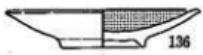


134



135

第43号住居址



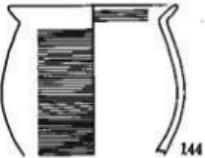
136



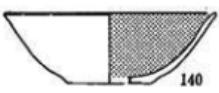
138



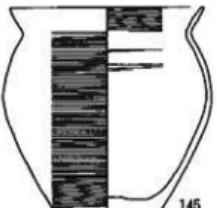
139



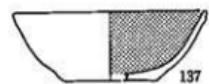
144



140



145



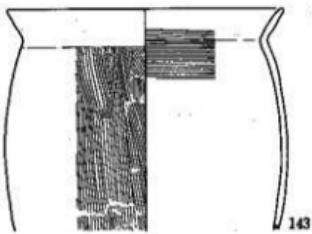
137



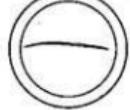
141



142



143



146

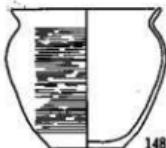
第44号住居址



147



149



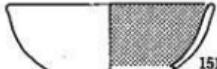
148



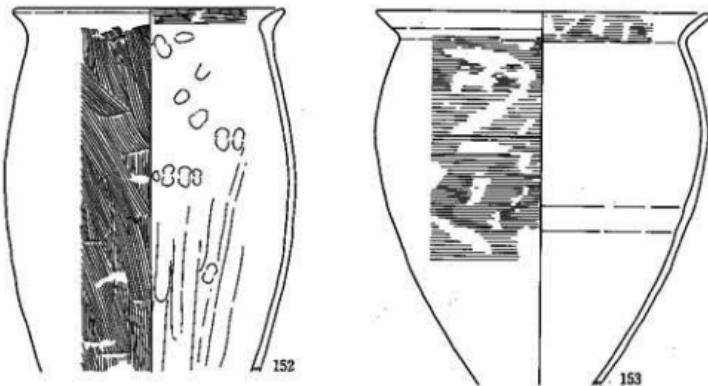
151



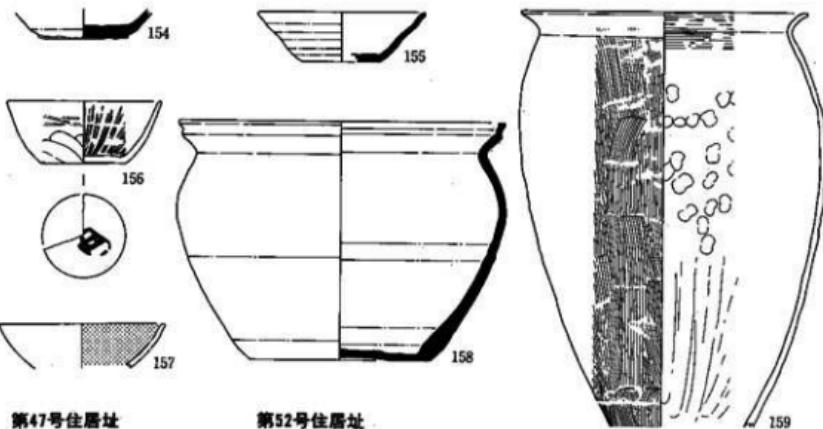
150



0 5 10cm



第46号住居址



第47号住居址

第52号住居址

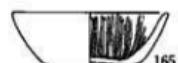
第49号住居址



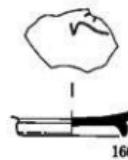
161



162



163



164



165



166

0 5 10 cm

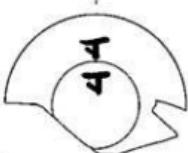
第53号住居址



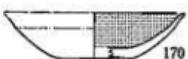
168



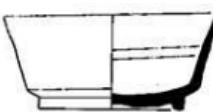
169



170



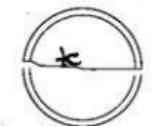
171



172

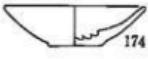


173



174

第56号住居址



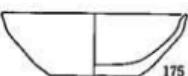
174



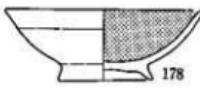
175



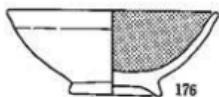
180



177



178



179

第57号住居址



181



182

第62号住居址



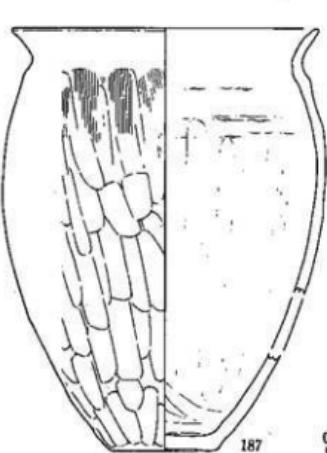
183



184



185

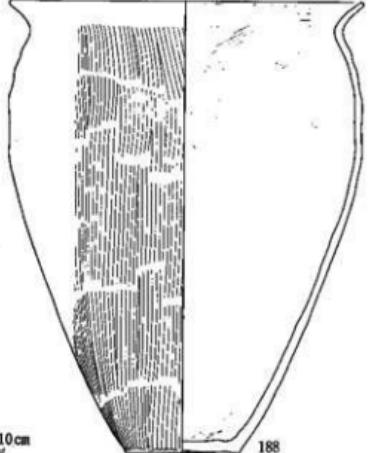


187



186

0 5 10 cm

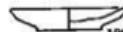


188

第60号住居址

第63号住居址

出土土器



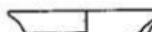
189



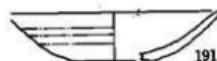
194



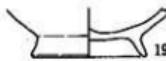
190



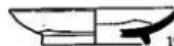
195



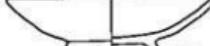
191



196



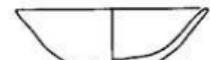
192



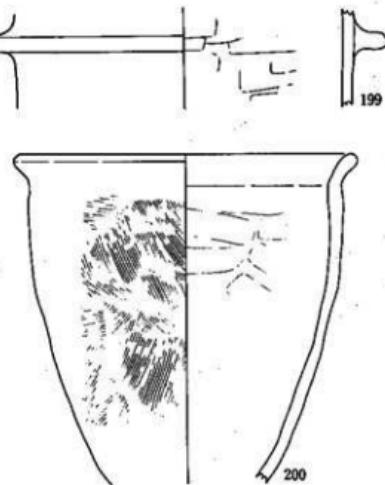
197



193



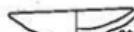
198



199

200

第64号住居址



201

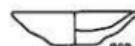


202

第61号住居址



205



203



207



208



204



206

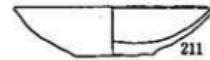


209



210

第65号住居址



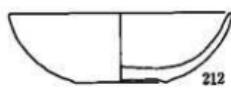
211



214



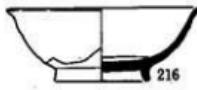
215



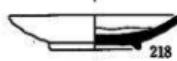
212



213



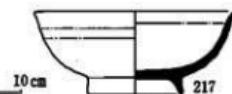
216



218

0 5 10 cm

10 cm



217

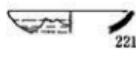


219

第65号住居址



219



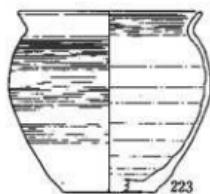
221



220

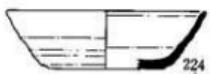


222

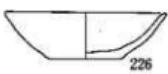


223

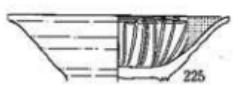
第67号住居址



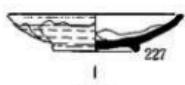
224



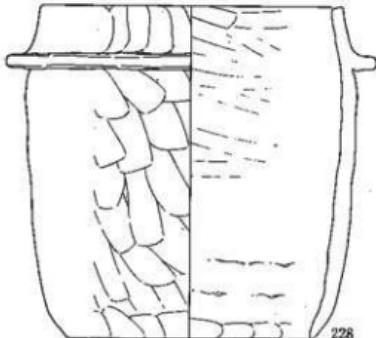
226



225



227

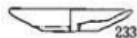


228

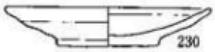
第69号住居址



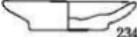
229



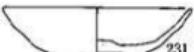
233



230



234



231



232



235

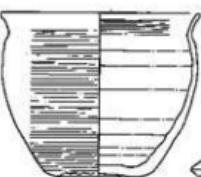


236

第70号住居址



237



239



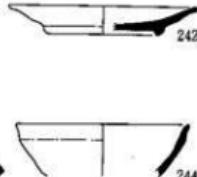
241



238

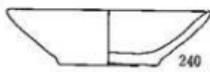


243



242

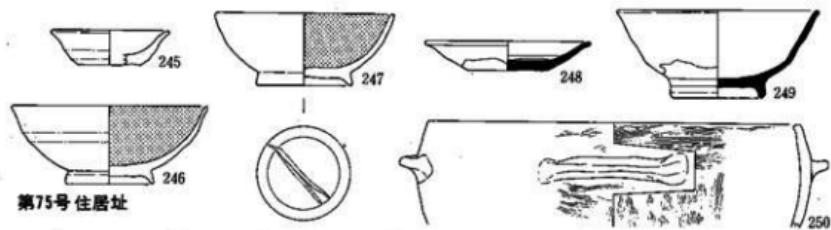
第71号住居址



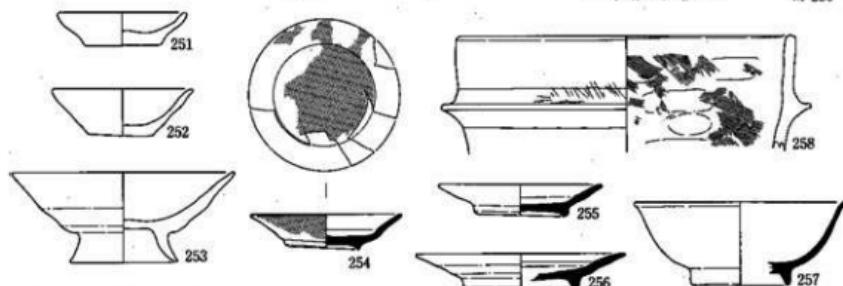
240

0 5 10 cm

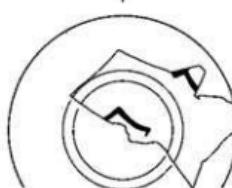
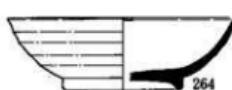
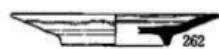
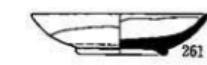
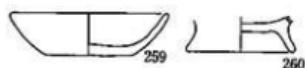
第74号住居址



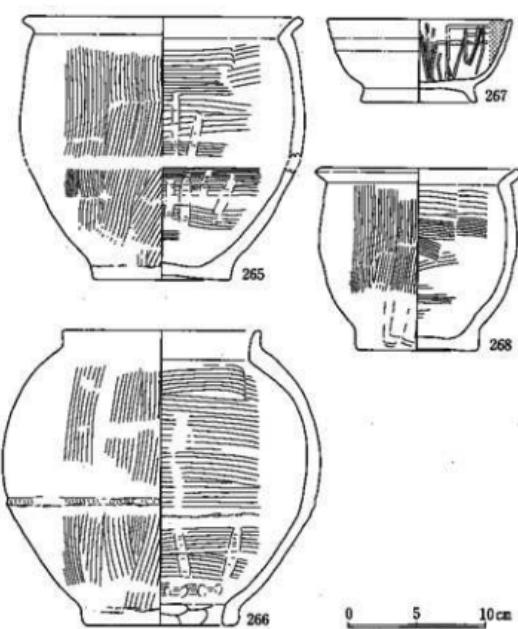
第75号住居址



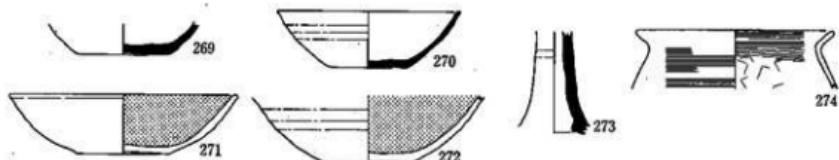
第76号住居址



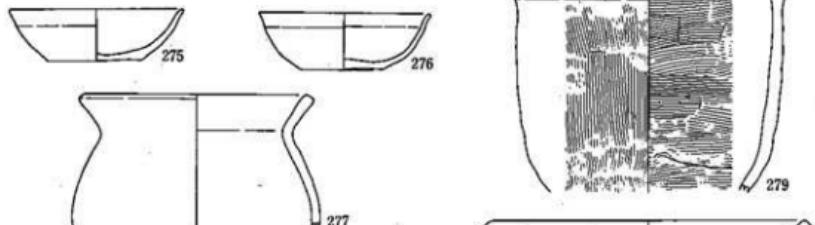
第77号住居址



第78号住居社



第79号住居社



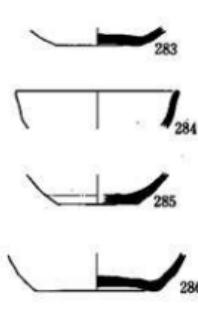
第80号住居社



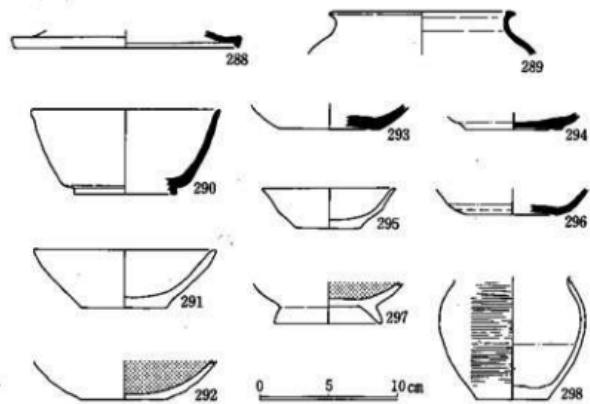
第81号住居社

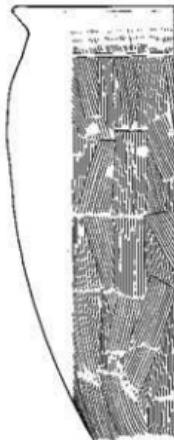
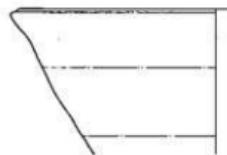


第83号住居社



第84号住居社





第85号住居社

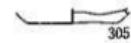
第86号住居社

第88号住居社

第90号住居社



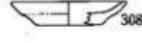
302



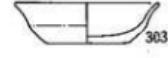
305



307



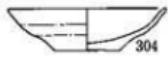
308



303

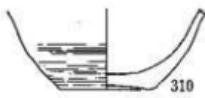


306



304

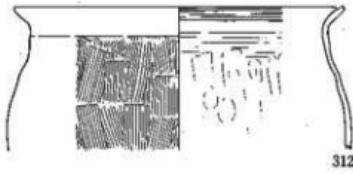
第89号住居社



310

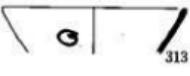


311



312

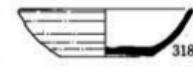
第91号住居社



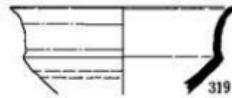
313



317



318



319



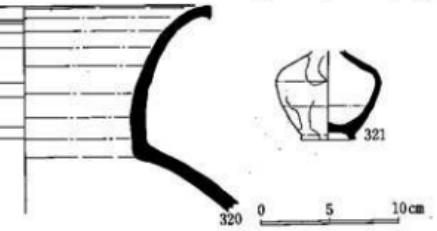
314



315

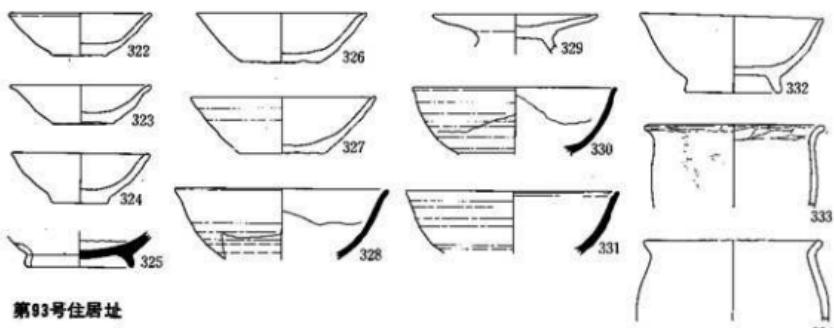


316

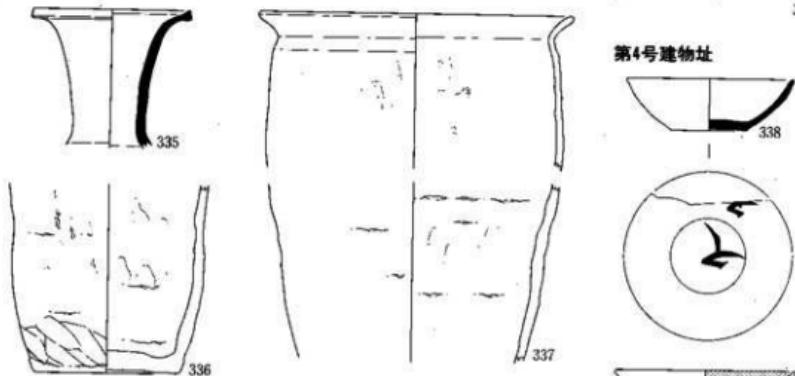


320 0 5 10 cm

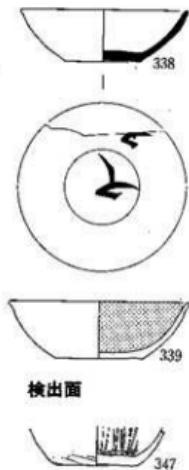
第94号住居址



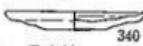
第93号住居址



第4号建物址



第101号土坑



第118号土坑



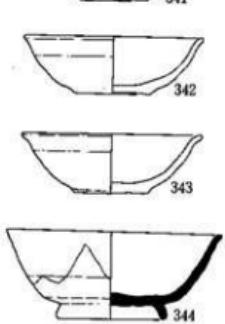
第5号竪穴状造構



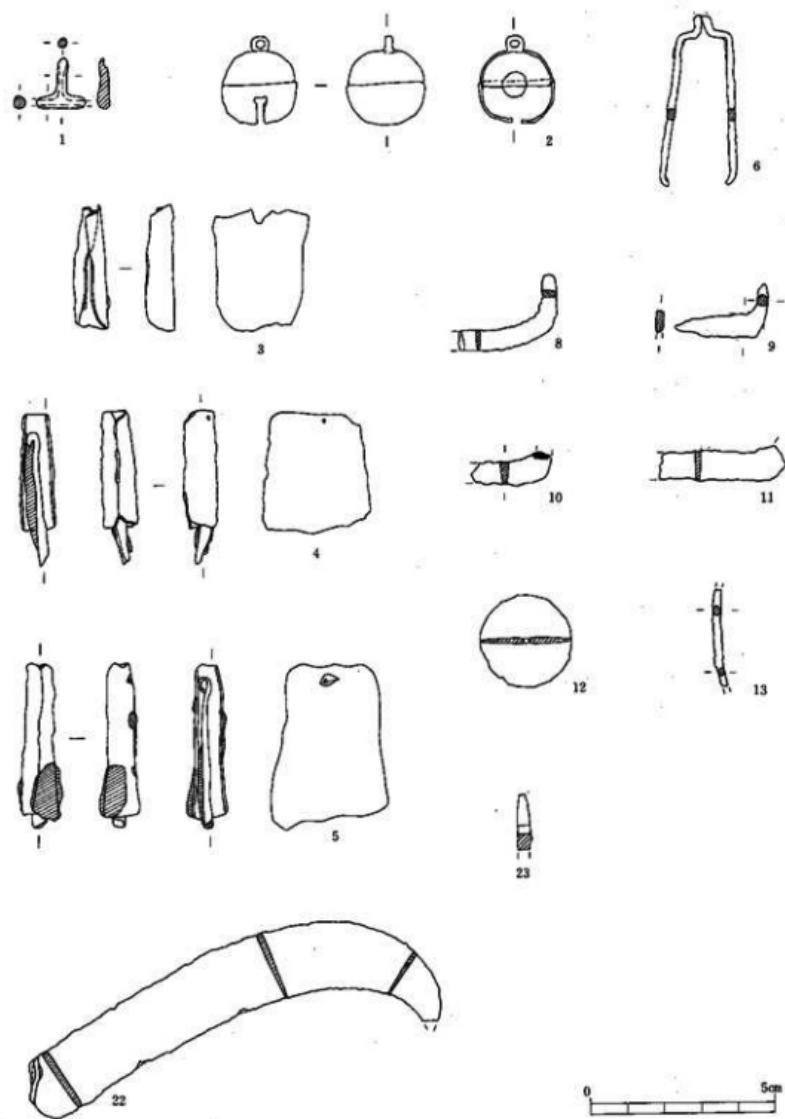
第6号竪穴状造構

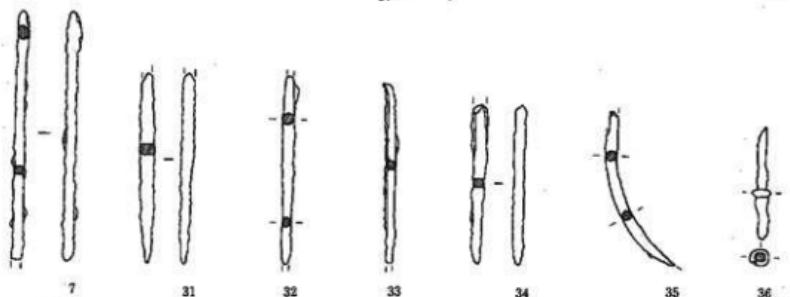
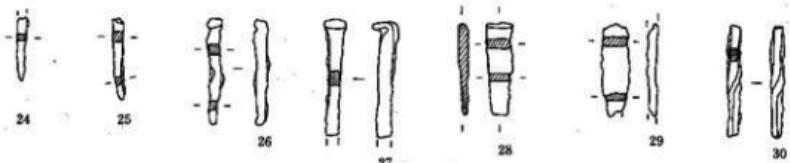


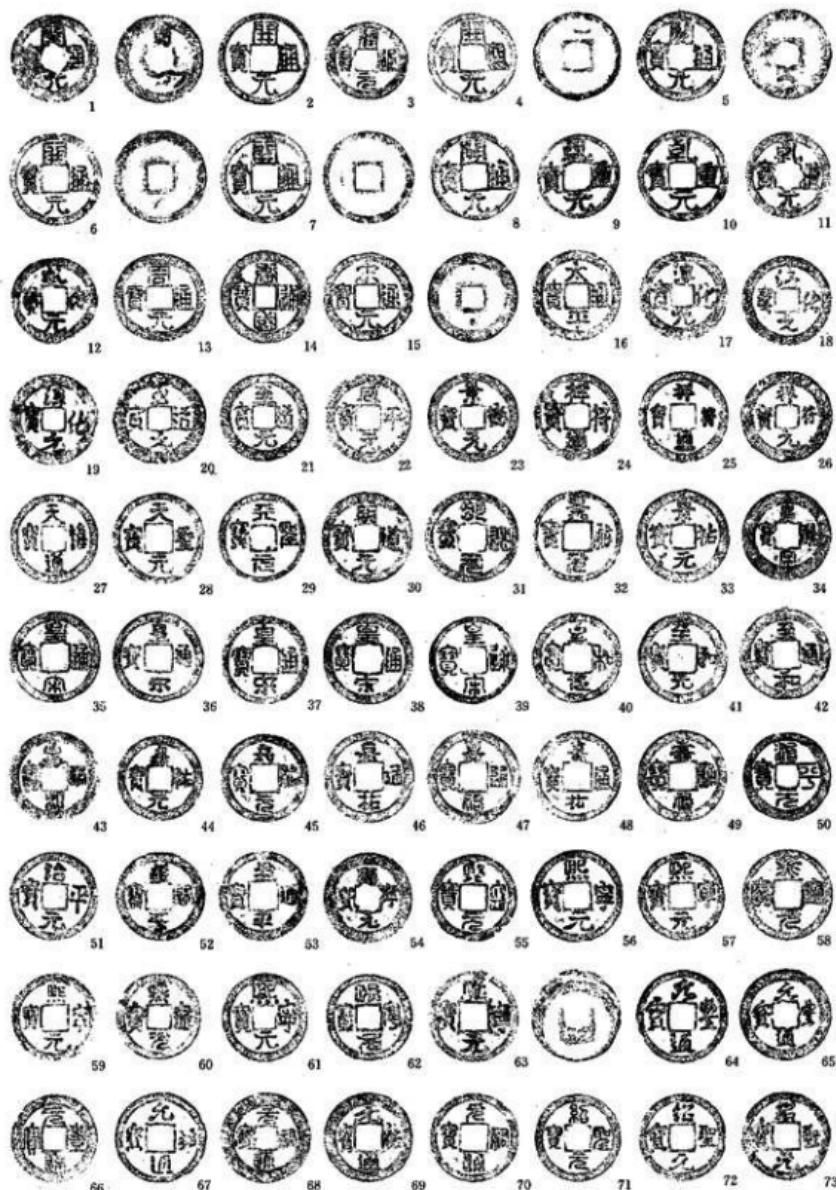
縄文晩期末葉の土器



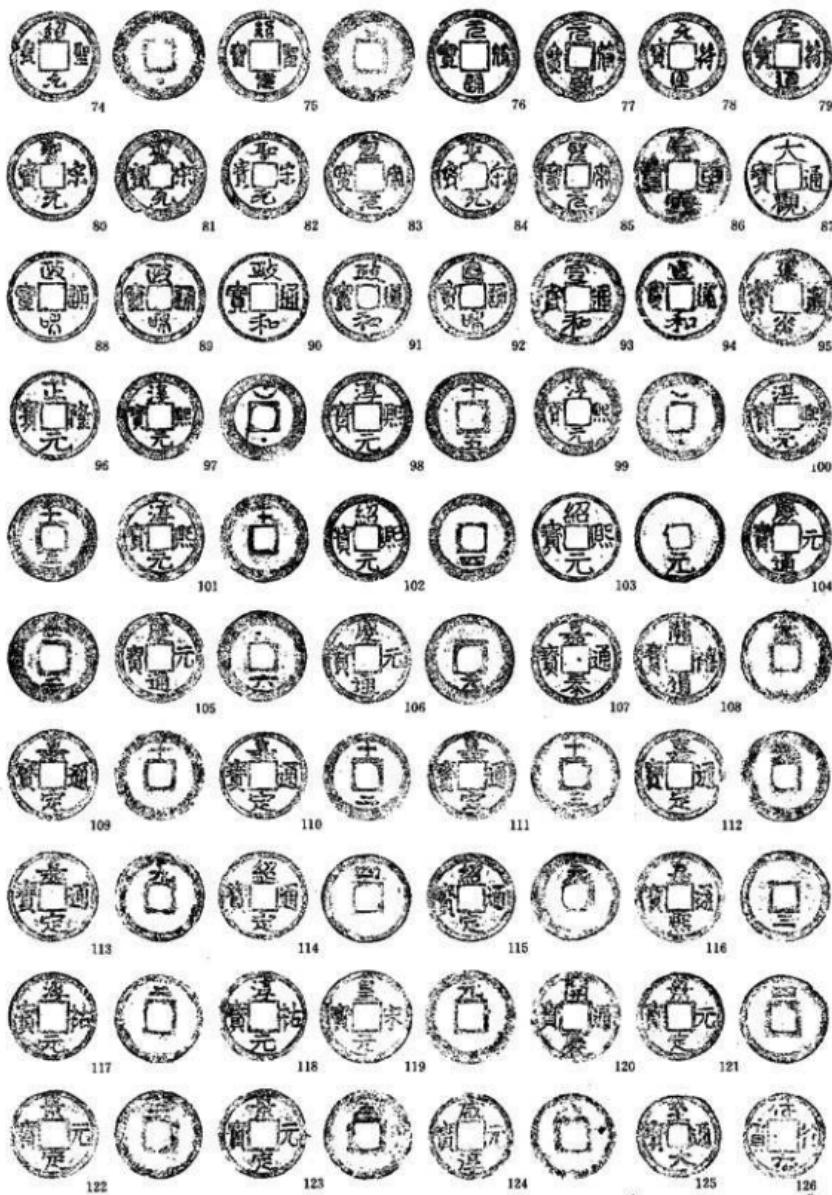
0 .5 10cm



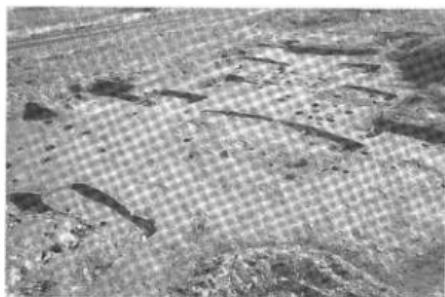




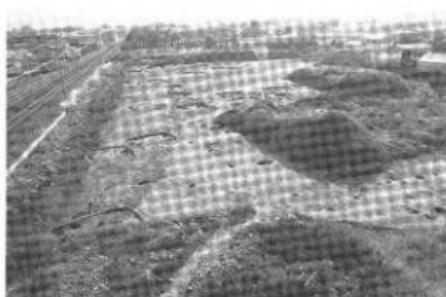
0 5cm



0 5cm



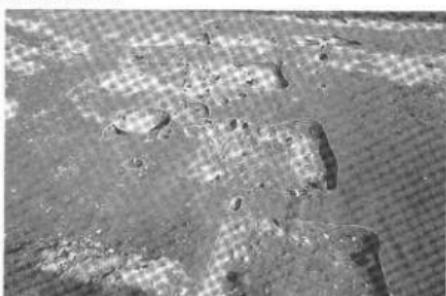
14区全景（北から）



15区全景（北から）



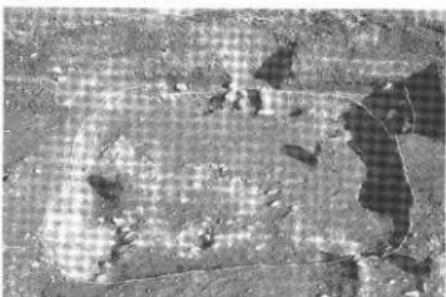
15区南西部上坑・ピット群(南から)



15区中央部住居跡群（西から）



15区北西部（北から）



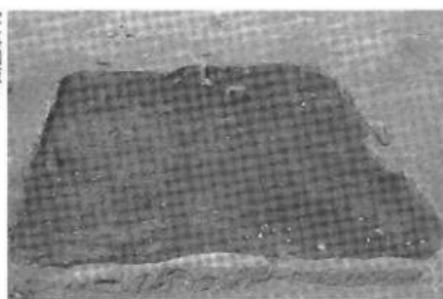
第34号住居址（西から）



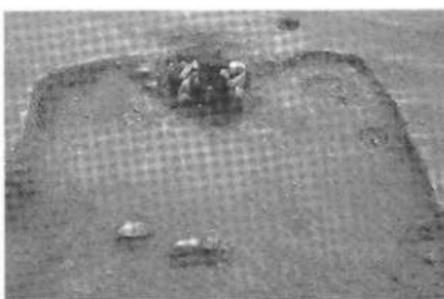
第34号住居址カマド



同左 鉄鍋出土状況



第37号住居址（東から）



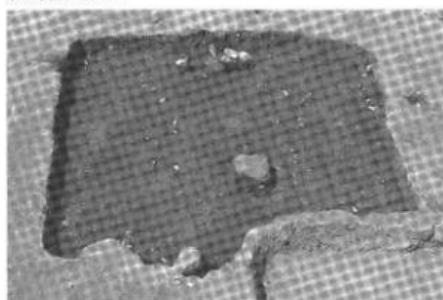
第38号住居址（西から）



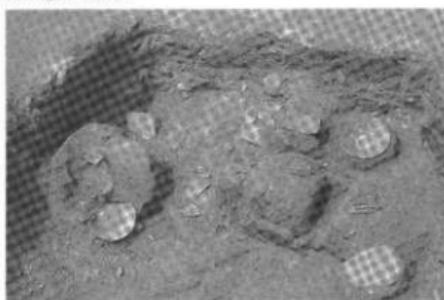
第38号住居址カマド



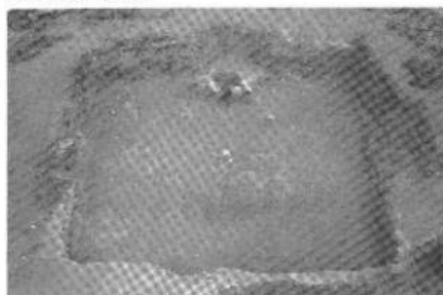
同左 遺物出土状況



第39号住居址（東から）



同左 遺物出土状況



第40号住居址（西から）



第41号住居址（東から）

